

# VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2024

6

June

表紙の学校  
北海道  
岩見沢東高校

特集

## 定期考査は必要か？



### 今号の掲載校

宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部 / 岩手県・私立専修大学北上高校 / 奈良県立<sup>かしはら</sup>橿原高校 /  
奈良県立商業高校 / 鹿児島県立<sup>あぐさ</sup>鶴丸高校 / 宮城県<sup>みやぎ</sup>涌谷高校 / 東京都立<sup>なげのたけ</sup>竹台高校 /  
奈良県・私立奈良育英<sup>だいにし</sup>中学校・高校 / 石川県立大聖寺高校

# 先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

探究学習に没頭した  
生徒が直面した壁。  
通じない電話の向こうに  
教師が描いたその姿とは

宮崎県立宮崎東高校  
定時制課程夜間部  
西山正三

にしやま・まさみ ● 同校に赴任して6年目。理科。4学年担任。前任校の宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で探究学習に長くかかわる。現任校では、哲学対話などを通して生徒が自ら見いだした課題に取り組み、進路実現につなげる探究学習を構築した。



「先生、少しいいですか？」。遠慮がちに話しかけてきた2年生のAさんは、「最近読んだ本にこんなことが……」と、明治時代の日本人の価値観について私に語り始めました。中学1年次から不登校を経験し、学校では1人で本を読んでいることが多いAさんが、たまっていた知識を吐き出すように語る様子を見て、彼女は自分の学びを受け止めてくれる相手を探しているのだと気づきました。「Aさん、毎週水曜日の放課後の30分間、今日みたいに先生と話す？」。私のその提案を受け入れたAさんは毎週、文学や思想などのテーマで私に話をしてくれました。内容が高度で、私はうなづくことしかできないこともありましたが、話した後のAさんはすっきりした表情になったように私には見えました。

そんなAさんが探究学習に没頭したのは必然だったのでしょう。驚くような質と量の文献と格闘しながら、明治時代の民衆が日清戦争や日露戦争に賛同した理由を考察する彼女の助けになればと、私は本校の探究学習を支援する社会人からAさんが意見をもらう機会を設けました。大人たちはAさんの深い洞察に敬意を示すように、Aさんを子ども扱いすることなく意見を述べ、Aさんもそれに真摯に耳を傾けました。

ところがAさんは、その直後から学校を休みました。携帯電話にかけても、電話でのやり取りが苦手な彼女が私の電話に出ることはありません。思いあたる理由は探究学習だけです。社会人の真剣なフィードバックに傷ついてしまったのだ。繊細なAさんには時期尚早な場だったのかもしれない。Aさんが今度学校に来たら、自分の配慮が足りなかったことを謝ろう。私の心の中はそんな思いでいっぱいでした。でも、心の隅では「家で探究学習に没頭しているのかも」と、希望も抱いていました。もしそうなら、何度も電話をかけるのは彼女の思索の邪魔になる。耐えるようにAさんの登校を待ちました。

1週間後、Aさんは何事もなかったかのように、「これを見てください」と、探究学習についてまとめたスライドを持って学校に来ました。社会人の助言を基に見事に練り直したスライドを見て驚く私にAさんは、「寝るのを忘れるくらい集中しました」「すごく幸せな時間でした」と、満足げな表情で言いました。学校を休んだことも、電話に出なかったことも、私ははとがめませんでした。学びの才能がたくましく開花した瞬間に立ち会えた感動を、Aさんのそばでただただかみしめていました。

西山先生はAさんとのやり取りの中で迷うことはなかったのか。どのような信念を持ってAさんと向き合ったのか。Aさんの探究学習のその後も紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article28004/>

## 巻頭 先生なら、どうしますか？

探究学習に没頭した生徒が直面した壁。  
通じない電話の向こうに教師が描いたその姿とは  
宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部 西山正三

## 2 特集

# 定期考査は必要か？

- 4 事例1 再チャレンジ可能な単元テスト 岩手県・私立専修大学北上高校
- 8 事例2 全県立高校で定期考査を廃止 奈良県教育委員会  
実践例 奈良県立橿原高校 / 奈良県立商業高校
- 15 事例3 単元テストと伝統の実力考査 鹿児島県立鶴丸高校
- 19 事例整理 定期考査の現状と課題
- 20 インタビュー テスト研究の専門家が説く「よいテスト」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 石井秀宗
- 24 高校生座談会 私たちにとって「テスト」とは

26 発問・課題設定をキーに見る  
主体的・対話的で深い学び 授業実践

26 国語  
宮城県涌谷高校 根元 学

30 化学  
東京都立竹台高校 折霜文男

お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

34 探究学習 つながり、伴走する教師たち

奈良県・私立奈良育英中学校・高校  
テーマ 探究×進路

お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36 指導変革の軌跡

石川県立大聖寺高校  
校内研修

お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

40 大学入試トレンド解説

新課程1期生の志望動向と  
学習の特徴から見えてくる指導のポイント

お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

48 Reader's VIEW

VIEWnext 高校版は、2024年8月15日に創刊50周年を迎えます。  
そこで、創刊50周年を記念するオンラインセミナーを開催いたします。  
詳しくは、最終ページのお知らせをご覧ください。

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ペンダコ 執筆協力／二宮良太 撮影協力／浅野優香、  
荒川潤、筒井岳彦、ヤマグチイッキ イラスト協力／カモ  
※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。  
※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。 ©Benesse Corporation 2024

# 定期考査は必要か？

定期考査を廃止し、各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストを導入する動きが徐々に全国の中学校や高校に広がりつつあります。

これまで多くの学校で欠かすことのできない評価方法として実施されてきた定期考査ですが、その意義・必要性を問うきっかけを学校現場にもたらしたと考えられるのが、高校では2022年度から実施された現行の学習指導要領です。それまでは定期考査などのペーパーテストで「知識・技能」を中心に測り、その結果が評定を算出する上で大きなウェイトを占める傾向がありました。しかし、現行の学習指導要領では、「知識・技能」以外の観点でも評価する観点別学習状況の評価の実施がこれまで以上に求められており、定期考査中心の学習評価のあり方に改善の余地があることが示されました。

本特集では、定期考査が抱える問題を整理しながら、その解決の糸口を、事例を通じて考えていくとともに、「定期考査は必要か？」という問いを探究してまいります。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

## P.4 事例1

再チャレンジ可能な単元テストによる評価で、  
目標に向けて主体的に学ぶ意欲を育む  
岩手県・私立専修大学北上高校

## P.8 事例2

学習評価のあり方を見直す起爆剤として、  
全県立高校で定期考査を廃止

奈良県教育委員会

実践例 ● 奈良県立<sup>かしはら</sup>橿原高校

教師間の密な対話を通じて評価方法を毎年更新。  
生徒の質問の質が上がり、欠点者が減少

実践例 ● 奈良県立商業高校

実技も評価に組み入れ、指導と評価の一体化を推進。  
資格取得率向上にもつながる

## P.15 事例3

単元テストと伝統の実力考査で高い目標の実現を支援  
鹿児島県立鶴丸高校

## P.19 事例整理

自校の定期考査の現状と課題についての整理が  
議論の第一歩

## P.20 インタビュー

「よいテスト」は、生徒と教師をつなぐ  
学びのコミュニケーションツール

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授 <sup>ひでとき</sup>石井秀宗

## P.24 高校生座談会

私たちにとって「テスト」とは

## 高校教師の定期考査に対する考え

### Q1 貴校について、 次のようなことはあてはまりますか。

◎ 学校全体で、定期考査の回数を減らすことを検討している



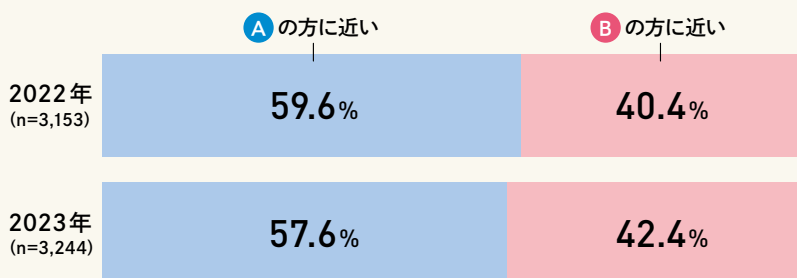
### Q2 あなたが重視していると思う方はどちらですか。

A

指導改善や  
成績評価のためには、  
定期考査が欠かせない

B

指導改善や成績評価のためには、  
定期考査がなくても、  
単元テストがあればよい



※ Q1・2及びその結果は、ベネッセ教育総合研究所「学習指導調査 2022」「学習指導調査 2023」を基に編集部で作成。

#### 現場の教師の声

##### 定期考査は必要

- 複数の単元が範囲となる定期考査を実施することで、生徒の深い思考力を測ることができる。
- 定期考査で学習の量、質ともに少し高めハードルを設定し、乗り越えることが、生徒の成長には必要。
- 定期考査期間中や1週間前等は部活動等の活動の休止や活動時間の短縮があり、生徒の学習時間が確保される。
- 校内順位を知る重要な機会の1つ。
- 定期考査期間中はどの生徒も学習に没頭しやすい環境になる。

##### 定期考査は不要

- 全校または学年で一斉に実施するため、出題範囲が単元の途中になることがあり、単元ごとの評価が行いにくい。
- 考査と考査の間の空きが長く、生徒の学習上のつまずきの発見や、理解度の確認の機会として不十分。
- 出題範囲が広く、生徒はいわゆる「一夜漬け」で乗り切り、考査後、学習した内容を忘れてしまうことがある。
- 考査前も含め、定期考査期間中は、部活動や探究学習等の諸活動を休止しなくてはならない。

## 定

定期考査を廃止している高校は現時点ではまだ少ない。だが、定期考査を廃止したり、実施回数を減らすことを検討している高校は着実に増えており(Q1)、また、「指導改善や成績評価のためには、定期考査がなくても単元テストがあればよい」と考える教師は40%を超えている(Q2)。「現場の教師の声」が示すように、定期考査の存続にも、定期考査の廃止に

も、それぞれ納得できる理由が存在する。観点別学習状況の評価の実施がこれまで以上に求められる中、学習評価において重要な役割を担ってきた

定期考査は、これからも必要なのだろうか。その答えは、どのような点を考えれば出るのだろうか。

先生方とともに  
考えたい「問い」

自校では定期考査は必要なのだろうか。  
その答えは、どのような点を考えれば出るのだろうか。

# 再チャレンジ可能な単元テストによる評価で、 目標に向けて主体的に学ぶ意欲を育む

## 岩手県・私立専修大学北上高校

岩手県・私立専修大学北上高校は、2023年度から普通科の一部の専攻で定期考査を廃止し、単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入した。生徒が主体的に目標を設定し、学びの意欲を高められるように、単元テストの再受験を認め、その結果も総括的評価に組み込んでいる。再チャレンジが可能な単元ごとの評価は、教師や生徒にどのような変化をもたらしたのだろうか。

### 各教科・科目の到達目標と到達の時期を生徒が決める

専修大学北上高校は、2022年度から「未来を創る力」をキーワードとした普通科改革に取り組んできた。それまでの普通科を、探究学習やPBL（\*1）を中心に学力の向上を図るディープラーニング（DL）コース（学問探究・PBLの2専攻）、福祉やビジネス、スポーツ科学などの専門分野を追究するアクティブラーニング（AL）コースの2コースに改編。コース・専攻の目的に応じたカリキュラムの開発とともに、新しいシラバス（学期シラバス）の作成にも取り組んだ。

新シラバスの特徴は、学習の到達目標を生徒自身が決める点にある。教科・

科目ごとに、基礎・標準・発展の3つのレベルを設け、それぞれ学期ごとのTODO、CAN-DOをシラバスに明記。

生徒は将来の志望や現状の学力に応じて、目指すレベルを自分で選ぶ。それは生徒がより主体的に学びに取り組むための工夫だ。そうした生徒の主体的な学びの実現を目指す改革の延長線上に、定期考査の廃止と単元テストを軸にした単元ごとの評価の導入が行われたと、川村俊彦副校長は説明する。

「各教科・科目の学習の到達目標を生徒が自分で決めるのであれば、目標に到達する時期も生徒に決めさせて、学びの見通しを持つ経験を積ませたい。そして、もし自分が設定した目標に到達しなかった時は、今の自分は何ができて、何ができていないのかを自

分で把握し、目標に到達するために何度でも挑戦できる仕組みをつくらうと考え、評価の改革に着手しました」

かつての同校における総括的評価の中心は、多くの学校と同様、定期考査で実施されるペーパーテストだった。定期考査は決められた時期に一斉に実施されるが、部活動で全国レベルの活躍をする生徒や探究学習などで校外での活動に取り組む生徒、テスト期間中に体調不良になった生徒などは、万全のコンディションでテストに臨めるとは限らない。また、例えば1学期に低い点数を取ってしまうと、その時の出題内容を2学期以降に努力して習得したとしても、評価の結果を変えることができないのが定期考査だ。

さらに、授業における単元間の切れ

目で定期考査が実施されるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多かった。そのため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しかった（図1）。

「大切なのは、生徒が確実に学力を身につけることであり、例えば1学期に学習した単元を2・3学期に理解することがあってもよいはず。本物の学力を身につけさせるためには、定期考査を区切りにして評価するのではなく、再チャレンジの機会を与えることが必要だと考えました」（川村副校長）

そこで同校では、23年度から普通科DLコースの学問探究専攻で定期考査を廃止し、各単元の学習後に行う単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入。さらに、希望する生徒には単元テ

\* 1 Problem Based Learning、または Project Based Learning の略。

**学校概要**  
 設立 1951(昭和26)年  
 形態 全日制／普通科・グローバルビジネス科・メカニクエンジニアリング科／共学  
 生徒数 1学年約300人  
 2023年度卒業生進路実績 国公立大は、岩手大、公立はこたて未来大、岩手県立大、東京都立大などに8人が合格。私立大は、専修大、日本大、早稲田大、神奈川大、立命館大などに延べ134人が合格。



**今井智大**  
 キャリアセンター副部長  
 いまい・ともひろ  
 同校に赴任して9年目。数学科。



**野村学**  
 教務副部長  
 のむら・まなぶ  
 同校に赴任して21年目。国語科。



**吉田俊哉**  
 キャリアセンター部長  
 よしだ・しゅんや  
 同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科(公民)。



**川村俊彦**  
 副校長  
 かむら・しろう  
 同校に赴任して3年目。理科(化学)。

図1 これまでの定期考査の課題(「化学基礎」を4学期制で学ぶ場合)

単元1				単元2								
物質の分類と分離	物質の三態	原子の構造	電子配置	イオンの形成	イオン結合	共有結合	金属結合	配位結合	周期的性質	元素の働き	分子間に働く力	結晶の性質
1学期の学習範囲＝定期考査範囲 40点								2学期の学習範囲＝定期考査範囲 60点				

課題1) 授業における単元間の切れ目で定期考査が行われるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多いため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しい。

課題2) 1学期の定期考査が40点だったとすると、その定期考査の範囲だった単元の理解度が2学期以降、40点以上になっても、1学期の定期考査の40点は変わらず、それが評定に反映されてしまう。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 再チャレンジが可能、単元ごとの評価の仕組み

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10	20	20	10	10	10
思考・判断・表現	10	20	10	10	10	10
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10	10	10	10
単元の素点 計	30	50	40	30	30	30
学期の評点	40			30		

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10 20(再)	20 30(再)	10 20(再)	単元テストの再チャレンジの実施方法や時期は各教科・科目によって異なり、学期を超えて複数回チャレンジできる教科・科目もある。		
思考・判断・表現	10 20(再)	20 40(再)	10 20(再)			
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10			
単元の素点 計	30 50	50 80	40 50			
学期の評点	40 60					

※学校資料を基に編集部で作成。

ストの再チャレンジを認めることとした。23年度は2年次の学問探究専攻のみでの導入だったが、24年度からは1・2年次のDLコース全体に拡大した。

**1学期の単元テストの成績が2学期以降の再挑戦で更新**

評価の考え方は図2の通りだ。従来

は学期ごとに成績をつけて、最後にそれを足して学期数(同校は4学期制)で割り、総合的評価を行ってきた。当然、一度成績がついた学期の評価を変えることはできなかった。一方、新しい評価の考え方では、2学期は1・2学期の成績で、3学期は1〜3学期の成績で評価するというように、常に年度内のすべての単元が評価対象とな

る。そして、単元ごとの評価の材料となる単元テストの成績は、再チャレンジによって更新可能とした。

例えば、1学期に行った単元1の単元テストの結果が100点満点で40点であっても、2学期や3学期に再チャレンジして80点になれば、単元1は80点で評価される。

「私たちが育てたいのは、最初の結

果が40点だったとしても、60点、80点を目指して努力を続けることのできる生徒です。再チャレンジによって弱点を克服することができたのなら、それは真の学力が身についたということでしょうし、1年間で何ができるようになったか、何を身につけたかを正しく見取り、その結果を評定に反映させることが真の評価のあり方だと考えています」(川村副校長)

## 再チャレンジの方法・時期は教科・科目ごとに決定

単元テストの再チャレンジの実施方法やタイミングは、各教科・科目担当に任されている。川村副校長が担当する化学では、毎週火曜日を再チャレンジの日として、朝の「専北塾」(※2)の時間で単元テストの再チャレンジを行っている(写真)。生徒は、再チャレンジしたい単元を川村副校長に申し出て、川村副校長はその都度、新しいテストを用意して取り組ませている。数学の今井智大先生のクラスは、昼休みや放課後に単元テストの再チャレンジを受け付けている。既に8割近い点数が取れていても、よりよい成績を目指して再チャレンジを希望する生徒もいる。なお、今井先生は、単元テ

ストの得点が3割以下の生徒には、学力保障の観点から、再チャレンジを必須としている。

野村学先生が担当する国語では、単元テストの結果と単元末に課すレポート、そして「R80」(※3)を材料に、単元ごとの評価を行っている。単元テストでは主に知識・技能の観点で、単元末レポートでは主に思考・判断・表現の観点で評価する。単元末レポートのテーマは、単元で取り上げた素材文の内容が、他教科・科目や社会的なトピックなどどうつながっているのかを考えさせるものになっている。

「当初の単元末レポートは、単元で取り上げた素材文の内容を振り返るだけのものでした。ところが何人かの生徒が、学んだ内容だけでなく、ほかの教科・科目の内容との関連まで言及したレポートを書いてきたのです。教師の想定を超えて生徒は学びを広げられるのだと気づき、単元末レポートのテーマを変えることにしました。生徒の可能性を知ったことで、評価のあり方が改善されたのです」

生徒が持つ資質・能力の高さに気づいた野村先生は現在、単元テストで初見の素材文を使用することを検討している。

「汎用的な力を身につけさせるため

には、教科書に載っている素材文とは異なる素材文を使った単元テストを行い、単元の学習目標に到達しているかどうかを見る必要があります。それが実現できれば、大学入試にも対応できる学力を単元テストを通して育むことが可能になると考えています」(野村先生)

## 評価と学力について議論する中で不安が払拭

定期考査の廃止と単元テストの実施が決まった当初は、「定期考査がないと生徒が集中して勉強しなくなるのではないか」「頻繁に単元テストが実施されるようになると、生徒が単元テストの対策に追われ、疲弊するのではないか」といった不安を口にする教師も少なくなかった。そうした声に対して川村副校長は、定期考査が抱えている問題や、単元テストを軸にした単元ごとの評価の意義を説き、教師間の共通認識を図っていった。そして、単元テストの実施が始まってしばらくすると、生徒が日常的に学習する姿が見られるようになり、教師たちの考えは変わっていった。

キャリアセンター部長の吉田俊哉先生は、学校を変えなければならない



写真 3年生「化学」の単元テストに再チャレンジする生徒たち。

という思いを、教師たちが潜在的に持っていたと指摘する。

「少子化が進む中、学校の魅力を高めていかなければいけないという意識を、私たち教師も少なからず持っていたのだと思います。それが定期考査の廃止と単元テストの実施という変化を受け入れる素地になっていたのかもしれない。定期考査の廃止と単元テストの実施は22年度の生徒募集でもしっかり告知しており、生徒は改革が行われている前提で入学しているので、保護者などから定期考査の廃止に対する問い合わせはありませんでした」

定期考査の廃止や単元テストの実施

\* 2 生徒が自分の学びたいこと、深めたいことを大切にして自ら選択し、専門性を高める放課後や長期休業中の学びの場。

\* 3 接続詞で結ばれた2文構成かつ80文字以内で活動を振り返る。「R」は、リフレクション(振り返り)とリストラクチャー(再構築)のこと。茨城県立並木中等教育学校の中島博司元校長が考案。



が教師たちに受け入れられたのは、単元ごとに評価することの意義をしつかり伝えたことも大きかったと、川村副校長は振り返る。

「その場しのぎではない真の学力を生徒につけさせたいという思いは、どの教師も同じです。定期考査の廃止や単元テストの実施という手法論から入るのではなく、評価の目的や生徒に身につけさせたい学力を何よりも優先して伝えたいからこそ、教師間の共通認識が図れたのだと思います」

### 生徒一人ひとりに寄り添う 教科面談を充実させる

一つひとつの単元をどのように教えるのかを、教師がより深く考えるようになったことも成果の1つだ。

「単元ごとの評価を行うようになったことで、その単元を通して生徒にどのような力を身につけさせるのか、そのためにどんな学習に取り组ませ、どのように評価するのか、授業計画をこれまで以上に練り、見直しを持って各単元に入っていくようになりました」  
（野村先生）

学期シラバスを基に単元シラバス（図3）を作成する教科・科目も出てきており、授業改善のスピードはさら

に上がっている。

また、単元ごとに丁寧に評価を行うようになったことで、生徒の資質・能力を見取る教師の力が高まっているように感じると、吉田先生は語る。

「単元ごとの評価を実施するようになってから、評価方法の引き出しが自分の中で増えていきます。私が担当する公民科では、単元テストだけでなく、パフォーマンステストを実施する機会を充実させたのですが、『この生徒はこんな深い洞察をするのか』などと驚かされることも増えました。定期考査で出していたような問題では見逃していた生徒の資質・能力を発見することができています」

今後の課題は、単元テストの再チャレンジの時間をいかに確保するかだ。再チャレンジは希望制のため、授業中に行うのは難しく、現状は朝の専北塾の時間や昼休み、放課後に行っている。生徒と教師双方の負荷を軽減するため、CLASS(\*4)を活用したCBT(\*5)形式での実施もいくつかの教科・科目で始まっている。

単元ごとの評価の実施を契機に、これまで以上に生徒一人ひとりと向き合っていきたいと、川村副校長は語る。

「単元テストを軸にした単元ごとの評価や単元テストの再チャレンジを実

施する目的は、生徒が自分で立てた目標を達成しようとする学びに向かうマインドを育成することにあります。目標と現状にギャップがある生徒を見逃すことなく、教科担当の教師が個別に面談

を行い、学習状況を生徒と一緒に検証して、学習方法の見直しや単元テストの再チャレンジを勧めるなど、生徒の主体的な学びを支えていきたいと考えています」

図3 単元シラバスの例（「化学基礎」）

R6 2年DL (学探・PBL)コース 化学基礎【化学結合】単元シラバス  
専修大学北上高等学校 授業担当者 近藤健一

評価方法	評価基準
・演習プリント、小テスト、個別添削プリント、課題実験の取組達成状況	・知識・演習プリント・小テスト(知識分野)の取組状況 ・思考・演習プリント・小テスト(思考分野)の取組状況 ・主体・授業・実験の取組姿勢

時数	履修内容	授業内容
1	①イオン結合 イオンの生成	【講義】イオンの生成について 【演習】問題プリント配布・イオンの小テスト①
2	イオンの表し方 イオンのなりやすさ	【講義】イオン化E・電子親和力について 【演習】問題プリント配布・小テスト取組時間
3	組成式の表し方	【講義】組成式の表し方【演習】組成式の小テスト②
4	【課題実験】イオン・イオン結晶の性質	水溶性・電導性(塩化ナトリウムの融解時の通電)・機械的性質(岩盤の割断)の確認
5	②共有結合 分子の生成	【講義】分子の成り立ち【演習】分子の小テスト③
6	電子式・構造式	【講義】電子式の表し方【演習】問題プリント配布
7	結合の種類・配位結合	【講義】配位結合について【演習】問題プリント配布
8	分子の極性・実験説明	【講義】次回の実験の説明【演習】小テスト取組時間
9	【課題実験】分子の極性	四塩化炭素の性質確認 極性・無極性物質の相違点
10	実験のまとめ	【講義】実験の考察【演習】問題プリント配布
11	分子結晶・高分子化合物	【講義】分子結晶【演習】高吸水性樹脂
12	共有結合の結晶	【講義】性質の説明【演習】問題プリント配布
13	金属結晶	【講義】自由電子と金属結晶【演習】問題プリント配布
14	化学結合のまとめ	【講義】化学結合のまとめ【演習】小テスト④

【授業方針】  
・講義時間は20分前後とし、授業の後半は演習時間として確保する。  
・様々な生徒の理解度、取組具合に対応する教材を事前に準備する。  
・生徒は小テスト、問題プリントを全て正答した状態を課題達成とする。  
・小テストは個別で取り組むものとし、問題プリントは協同して取組可とする。  
・演習時には、適宜状況監視を行い生徒の進捗状況を確認し、支援が必要な生徒には個別で対応する。  
・演習の内容は、授業の内容の確認として問題プリントを取り組ませる。また必要に応じて小テストを実施する。  
・問題プリントを終えた生徒には添削用プリントを配布し個別に添削を行う。

【授業内容のポジショニングマップ】

1つの単元をどのように展開・指導し、評価していくか、学びのストーリーを教師が描くために単元シラバスを活用したいと考えている。その際、進度やレベルだけでなく、講義中心か、生徒の活動中心かなど、学びのスタイルも意識する。今後、評価の観点や評価方法も単元シラバスに加え、単元シラバスを練り上げていく考えだ。

※学校資料を基に編集部で作成。

\*4 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。  
\*5 Computer-Based Testing の略。コンピューター上で実施する試験。

# 学習評価のあり方を見直す起爆剤として、 全県立高校で定期考査を廃止

## 奈良県教育委員会

奈良県教育委員会は、2022年度入学生から全県立高校で定期考査を廃止した。そのねらいは、各校が自校の学習評価のあり方を見直し、観点別学習状況の評価を充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を推進することにあった。学習評価の主軸である定期考査の廃止を各校はどう捉え、学習評価の方針や方法をどのように構築していったのか。県教委と普通科高校、商業高校に話を聞いた。

### 授業改善を促進するため、 評価方法を転換

奈良県教育委員会（以下、県教委）は、2021年度の2学期に、22年度入学生から定期考査を廃止することを、全県立高校に伝えた。学習評価において多くの学校が高い比重を置いている定期考査を廃止すれば、必然的に評価方法を見直すことになる。ひいては、授業をどう展開するかなどについて考えることに至るのではないか。そうしたねらいがあったと、高校教育課の辰巳理恵子課長補佐は語る。

「22年度入学生から実施された学習指導要領では、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善が求められており、本県は各校がそれを実現

できるよう、教員研修などを通じて支援をしてきました。しかし、多面的・総合的な評価が浸透せず、授業改善はなかなか進まなかったのが実態でした。そこで、教師が自分の指導計画や評価観を見直すきっかけになると考え、定期考査の廃止を打ち出したのです」

その方針に、学校現場からは戸惑いや疑問の声が上がった。県教委が、校長や教務主任会、授業研究会などで繰り返し説明したのは、定期考査の廃止はあくまでも手段であり、指導と評価の一体化を図り、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を充実させるために、授業のあり方を見直してほしいという点だった。そして、スクール・ポリシーに照らし合わせて指導計画を立て、3つの観点で生徒の学習状況を評

価することの重要性を伝えた。

また、評価方法を校内・教科内で議論した結果、複数の単元をまたいで評価することが適切なのであれば、各教科・科目で「総括テスト」を実施することは可能であり、総括テストを学年でまとめて実施する方がよいと判断するならば、それも1つの方法だと示した。ただし、テスト期間を設けても、それは従来の定期考査と位置づけが異なり、あくまでも「総括テスト」であること、テストの実施日にはテストだけでなく授業なども行うこととした。

「ペーパーテストだけでなく、多様な評価方法が取り入れられることで授業が変わっていくことを期待しました」（辰巳課長補佐）

さらに県教委は、各校に電子黒板や



高校教育課課長補佐  
辰巳理恵子  
たつみ・りえこ  
県教委に赴任して7年目。



高校教育課教育改革推進係  
係長  
喜多教人  
きた・のりひと  
県教委に赴任して5年目。

奈良県概要（2023年度現在）  
県立高校数 全百制28校、定時制4校、通信制2校  
生徒数 約1万9000人  
教員数 約1570人

Wi-FiなどのICT環境を整備。生徒がBYOD（\*1）で1人1台端末を活用できるようにすることで、授業改善や学習評価の実践を後押しした。

\*1 Bring Your Own Device の略。個人が所有するパソコン、タブレット、スマートフォンなどを、職場や学校に持ち込み、業務や学習に使用すること。

教師間で議論し、  
試行錯誤を重ねる

23年度に県教委が調査を行ったところ、すべての県立高校で中間考査が廃止されていた。期末考査の時期に総括テストを実施する学校は多いものの、単元テストやパフォーマンス課題、発表など、多様な方法で学習評価が行われていることが分かった。高校教育課教育改革推進係の喜多教人係長は、どの学校も校内で議論を重ね、試行錯誤しながら学習評価を実施している様子が見られたと語る。

「22年度の実践を通じて把握した課題に23年度は取り組んだ」という話を多くの学校から聞きました。例えば、『単元テストを実施したところ、教師も生徒も負担が大きかったため、校内で話し合い、実施方法を見直した』といった声です。これまで教師は何事も個人で取り組む傾向がありました。各教科とも、教科内や学年内の教師間で議論した上で取り組みを進めていました。それは指導や評価の改善を図る上で大切なことであり、新たな方法での学習評価につながったと考えています」

県教委は今後、授業改善の延長線上にある探究学習の充実を支援していく考えだ。

実践例

奈良県立橿原高校

教師間の密な対話を通じて  
評価方法を毎年更新。生徒の質問の  
質が上がり、欠点者が減少

1年目は期末考査の期間に  
総括テストを実施

奈良県立橿原高校は、奈良県の中に位置する地域の進学校だ。学習評価は、21年度まではおおむね定期考査7割、平常点3割の形で行われていたが、県教委の方針を受けて、教務部と教科主任会が連携し、新たな学習評価のあり方を検討した。

まずは教務部で原案を作成し、教科主任会で提案。各教科会で原案について検討した。そして、そこで出た意見を教科主任会で整理し、それを踏まえた修正案を教務部が作成して教科主任会で再び提案し、各教科会で修正案について検討した。1回の教科主任会ですら2〜3時間話し合ったこともあったという。そうした工程を繰り返した結果、22年度入学生からの学習評価は次の通りとした。

- ・ 定期考査は実施しない。
  - ・ 3つの観点別にA<sup>+</sup>A<sup>B</sup>C<sup>+</sup>C<sup>+</sup>の5段階(24年度からは3段階)で評価。
  - ・ 1つの単元の学習状況を複数の材料で評価し、各学期末には各単元の評価結果を総括して、各学期の評価をつける。その際はA<sup>+</sup>A<sup>B</sup>C<sup>+</sup>C<sup>+</sup>を数値化し、5段階の評定に総括する。
  - ・ 評価方法は、単元テストやパフォーマンス課題などとなるが、どのような方法で評価するかは、各教科・科目で決める。
  - ・ 単元テストなどは、各教科・科目の授業内で実施。実施時期や試験時間などは各教科・科目で決める。
- 22年度入学生の定期考査は廃止したが、22年度は2・3年生の期末考査の期間に総括テストを実施した。教務部長の上田裕史先生はこう説明する。
- 「定期考査をすべてやめることに、教師からは不安の声が上がりましたが、

	<p>校長 山内 祐司 やまうち・ゆうじ 同校に赴任して1年目。</p>
	<p>教務部長 上田 裕史 うえだ・ひろふみ 同校に赴任して11年目。数学科。</p>
	<p>教務部 西田 優輝 にしだ・ゆうき 同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。</p>
	<p>教務部 石原 嵩 いしはら・しゅつ 同校に赴任して3年目。数学科。情報科。</p>

**学校概要**  
 設立 1975(昭和50)年  
 形態 全日制/普通科/共学  
 生徒数 1学年約320人  
 2023年度卒業生進路実績 国公立大は、大阪教育大、奈良教育大、大阪公立大、奈良県立医科大などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ652人が合格。

そこで総括テストを実施することになりましたが、あくまでも評価材料の1つの扱いとし、全体の中での比重を大きくしないことを徹底しました」

## 2年目に「糧高チャレンジ」を実施するも、3年目に再検討

22年度の実践を踏まえて、同年度末には23年度の学習評価のあり方が検討された。当時の校長と教務部で検討した結果、学期末の総括テストも廃止することを教科主任会に提案した。しかし、「まとまった範囲を出題することも大事ではないか」という声が上がった。

そこで教務部が提案したのが、「糧高チャレンジ」。それは、総括テストを22年度と同様に実施し、テスト後の1週間をテストの結果に応じた学習に取り組み「ブラッシュアップウィーク」とするもの。総括テストを生徒の学習改善に確実につながるための方策だった。それが教科主任会で了承され、23年度の6月・11月の行事予定に組み込まれた。6月、3日間にわたり、午前の3コマで総括テストを実施した。午後は通常授業だったが、生徒から「翌日のテストが気になって、午後の授業に集中できない」といった声が多数上がった。「総括テストはあくまで評価材料の1つですが、多くの生徒が定期考査と同じ重みで受け止めていました。そこで、11月の実施形態を見直すことにしました」(上田先生)

11月の糧高チャレンジは、総括テスト

トを11月中旬の7日間、各日1時間のみでの実施とし、翌週をブラッシュアップウィークとした。テストを希望しなかった地理歴史科などの3教科以外が実施したが、6月の時のような声は生徒から上がらなかった。

3学期の糧高チャレンジも11月と同じ実施形態としたが、テストを希望する教科がなく、実施しなかった。3学期は授業日が少なく、単元テストやパフォーマンス課題などで十分に評価できると各教科が判断したためだった。

23年度末には、24年度の糧高チャレンジの実施形態が検討された。実施時期は23年度と同じく6月と11月に設定。期間中は45分授業とし、それによって捻出した朝の30分間でテストを行い、翌週をブラッシュアップウィークとした。しかし、実施を検討するとした教科は、家庭科とリスニングテストを実施予定の英語科のみで、その他の教科は単元テストなどで評価できるという判断だった。

「リスニングテストはクラスごとに行うよりも、一斉に実施する方が音漏れなどで他のクラスに迷惑をかけないで済むと、英語科から希望がありました。1〜2科目であれば、実施期間を設けなくても、時間割の変更で対応が可能です。現在は(5月上旬の取材時

図1 教師から多く上がった意見と、教務部の対応

**意見** 「単元テストは学年で一斉に行わないため、問題が他のクラスに漏洩し、公平性に欠けるのではないか」

**教務部** 「学習評価は、生徒一人ひとりの学習目標の到達度を測るものであり、他者との比較ではなく、授業の内容を理解したかどうかを確認するために実施するものである」と、学習評価の趣旨を丁寧に説明。また、多面的評価のため、評価の機会が複数回あり、不正を犯す意味がないことも伝えた。そして、事前に問題を開示するなど、問題が漏洩したとしても評価に影響がない方法を示した。

**意見** 「単元ごとの短時間のテストで、大学入試に対応する力が身につくのか」

**教務部** まず、「教科・科目の学習目標の到達度を測るためには、ペーパーテスト以外に、パフォーマンス課題やレポートなどが必要ではないか」と説明すると、それには賛同を得られた。そして、「大学入試に対応する学力も、授業で育むものではないか」と問いかけた。進路指導部と協議して、特別講座や模擬試験を増やすことで、試験慣れや解答テクニックの習得に対応するとして、理解を得た。

※取材を基に編集部で作成。

点 糧高チャレンジの実施の有無も含め、どのような実施形態にするか検討中です」(上田先生)

また、根強くあった「単元ごとのテストで大学入試に対応する力がつくのか」という意見に対しては、1・2年次の模擬試験の回数を増やすことにした(図1)。

## 担当教師間でこまめに話す中で、評価方法を軌道修正

定期考査の廃止を受けて、各教科・科目は、新たな評価方法をどのように構築していったのか。

地理歴史科の西田優輝先生は、以前から指導と評価の一体化を図るための評価方法を模索していた。その経験から、単元テストは大学入学共通テストと同じ出題形式とし、資料から読み取れることを文章の選択肢から選ぶ形を中心に出题(図2)。クフスによって選択肢の順序を変更するなど、正解の選択肢の番号を暗記しても意味がないようにしている。

「単元テストは、理解している点としていない点を確認するためのものだと、生徒に常々伝えていきます。糧高チャレンジでも、テストは30分間とし、残り15分間は解答を配布して、自己採点

図2 「歴史総合」の学習評価 概要

評価材料	単元テスト、授業プリント、パフォーマンス課題など
単元テスト	大学入学共通テストの出題形式を踏まえて、問題文の中で設定する場面は教師と生徒、生徒同士の会話などとし、解答は文章の選択肢から選ぶ問題を基本とする。
パフォーマンス課題	東欧や中東など、生徒になじみがない国を扱う場合、「先生が行きたいと思うようなスライドを作成する」といった課題を出す。
髙高チャレンジ	2023年度の1学期のみ実施。試験30分間、自己採点15分間とし、すぐに試験の結果を振り返られるようにした。

\*取材を基に編集部で作成。

図3 数学科の学習評価 概要

評価材料	単元テスト、レポート、単元テストの再提出など
単元テスト	節末で行う演習問題を単元テストにしている。試験時間は20分間程度。基礎問題と応用問題の両方を出し、例えば5問中、基本問題が2問できたらC評価、応用問題ができればB評価、全問できたらA評価とする。返却後、解き直して再提出をした場合、「主体的に学習に取り組む態度」で加点。

\*取材を基に編集部で作成。

と見直しの時間としました(西田先生)。「歴史総合」の担当教師は西田先生を含めて2人。西田先生が授業や課題の案を作成し、もう1人の担当教師と検討。評価規準もすり合わせている。「単元テスト以外にも、授業プリントやパフォーマンス課題など、評価材料は複数あるため、髙高チャレンジの2回目は実施しませんでした。定期考査を実施しない学習評価は初めての経験であり、計画通りに進むとは限りません。担当教師間でこまめに話して、微

調整しながら進めています(西田先生) 数学科では、単元テストやレポートなどを評価材料としている。試行錯誤の末、各節末にある演習問題を単元テストにすることにした(図3)。数学科の石原先生は次のように説明する。「定期考査の代わりにの評価材料を集めなければという思いから、単元テストの実施回数が多くなってしまうが、教師にも生徒にも負担が大きくなり、1年目にすぐに見直しました。元々、定期考査の問題は節末にある演習問題の

中から出していたので、それを評価材料にすることにしました。演習問題には普段はグループで取り組みませますが、単元テストの時は1人で解答させます。指導と評価が直結しますし、評価は3段階としているので、評価にさほど時間がかからないのもよい点です」以前は定期考査が評価の7割を占めていたため、提出物などを学年で統一しなくても問題にならなかったが、今は、科目の担当教師間で頻繁に打ち合わせをして、足並みをそろえている。「科目ごとに設けたリーダーが、担当教師に声をかけ、単元テストや評価規準などについて話し合うようにしています。単元テストの実施日が大幅にずれないように、授業進度の調整などもしています」(石原先生)

「こが分からない」と、具体的な質問をする生徒が増えましたし、継続的に学習している様子がうかがえます。ただ、それがつらいという生徒もいるため、そうした生徒への支援が課題です」また、課題がある生徒は単元ごとに支援するため、欠点となる生徒が大幅に減った。例えば数学科では、以前は各学期に10人程度、欠点となる生徒がいたが、今は1〜2人だ。保護者の新しい評価方法への理解も、少しずつ進んでいる。22年度入学時に学習評価の方針を説明した後も、面談などで度々単元テストの問題漏洩や生徒への負担感増などの懸念の声が上がった。その度に担任が、学習評価の趣旨や評価方法の工夫などを丁寧に説明し、理解を得るよう努めた。

**主体的に学ぶ姿勢が身につく、授業後の質問がより具体的に**

入学時から定期考査がなかった生徒は、今年度3年生となった。石原先生は、生徒に主体的に学ぶ姿勢が身につけてきていると感じている。

「以前は、定期考査の前に『対策プリントをください』と言い、一夜漬けで考査をしのぐ生徒が少なくありませんでした。今は、授業後に『この問題のこ

「二連の改革により、『生徒は定期考査があるから勉強する』といった生徒観が、教師の中で変化したと感じています。生徒は自身の理解度を把握して学習を工夫するようになり、教師の授業改善も進んでいます。今後、指導と評価の一体化を図ることが現在の方向性を維持し、よりよい実践に向けて検討と工夫を重ねていきます」

## 実践例

### 奈良県立商業高校

# 実技も評価に組み入れ、 指導と評価の一体化を推進。 資格取得率向上にもつながる

## 中間検査期間に単元テストを 実施するも、2学期は廃止

奈良県立商業高校は、県立で唯一の単独の商業高校として21年度に開校した。前身の奈良県立奈良情報商業高校などから引き継いだ伝統の商業教育に強みがあり、日商簿記1級や公認会計士を始めとする難関資格に挑戦する生徒を支援し、合格者を出している。24年度からは、日本商業教育振興会「スーパー・アカウンティング・ハイスクール」の指定校となった。

同校では、県教委の方針を受けて、教務部主体で自校の学習評価のあり方を検討した。教務主任の高谷伸也先生は次のように語る。

「県教委が示した学習評価の方針は、22年度入学生から対象となるものでしたので、学校全体で改革意識を持ってたわけではありませんでした。管理職

と教務部が新しい学習評価の枠組みを作り、各教科に説明しました」

・1つの単元を2観点以上で評価。学期内で扱う単元を3つの観点で評価できるようにする。

・評価はABCの3段階。数値では表記しない。

・学期内で扱った単元の評価を、観点ごとに平均を出してその学期の評価とする。

・中間検査は廃止。総括テストは期末検査を実施していた時期に年3回実施。実施は各教科・科目の任意。総括の評価の材料として必要なのであれば実施できる。ただし、定期検査のように高い比重を置かない。

・単元テスト、総括テスト、パフォーマンス課題、実技、振り返りなど、複数の評価材料を使って評価する。

中間検査の廃止には戸惑いの声が教師から上がった。そこで22年度の1学

期は、2・3年生に中間検査を行う期間に、1年生には単元テストを全教科・科目で一斉に実施した。

「単元テストは午前を実施し、午後は学校行事としました。しかし、作問や授業進度の調整など、教師の負担が大きかったため、2学期からは単元テストを全教科・科目が一斉に実施することはやめました」（高谷先生）

## あらゆる会議の場で繰り返し 観点別評価の意義を説明

新しい学習評価の枠組みを浸透させる上で徹底したのは、100点などの数値ではなく、ABCの3段階で評価することへの意識の転換だった。それまで1点刻みで評価していたため、教師から「3段階の評価で本当にいいのか」といった声が度々上がった。高谷先生はその都度、次のように説明した。

「観点別評価は、他の生徒と比べる評価指標ではありません。生徒の学習目標の到達度を見るものであるため、3段階の評価でよいことを伝えました。私自身、初めから観点別評価を受け入れられたわけではなかったのですが、先生方の不安に大いに共感し、機会がある度にそう説明しました」

会議の場で高谷先生から新しい学習



池田秀幸  
教頭  
いけだ・ひでゆき  
同校に赴任して1年目。



高谷伸也  
教務主任  
たかたに・しんや  
同校に赴任して6年目。商業科。



喜多純  
商業科長  
きた・じゅん  
同校に赴任して23年目。商業科（簿記）。生徒指導部。

### 学校概要

設立 2021（令和3）年  
形態 全日制／会計科、情報ビジネス科、経営ビジネス科、総合ビジネス科（\*2）／共学  
生徒数 1学年約200人  
2023年度卒業生進路実績 私立大は、同志社大、龍谷大、追手門学院大、大阪経済法科大、大阪商業大、近畿大、四天王寺大、摂南大、阪南大、桃山学院大、帝塚山大、天理大、奈良学園大などに延べ56人が合格。短大・専門学校進学68人。就職37人。

評価の枠組みの説明があったことで、教師の意識が次第に変化していったと、商業科長の喜多純先生は語る。

「21年度から、校内研修や学習指導研究会などのテーマは学習評価一色でした。県教委から指導や助言を何度も受けるうちに、観点別評価についての

\* 2 4つの学科は商業科としてのくくり募集。

理解を深め、不明点が解消されることで、新しい学習評価に挑戦しようという気持ちになっていきました」

同校の教師の半数を占める30代前半までの若手教師が、新しい学習評価に積極的に挑戦したことも追い風になった。例えば、「簿記」の授業は従来、問題を解くことが中心だったが、ある若手教師はパフォーマンス課題を作成し、生徒に取り組ませた。

### 1年目の実践を振り返り、評価規準を見直す

22年度が終わる頃、3段階での評価に関する課題が浮かび上がった。3段階での評価を総括した評定の平均値が、例年よりも低かったのだ。高谷先生は次のように説明する。

「私たちはB評価を100点満点の60点としてイメージし、B評価を基本に評価規準を作成していました。しかしそうすると、3つの観点が学習目標に到達してもBBBで、評定に総括すると5段階の3になります。学習目標に到達しているのに評定が3は低いと考え、23年度は評価と指導を総括的に再検討することにしました」

そして、生徒がA評価に到達できるよう、授業を改善したり、放課後に補

習をしたりして支援力を入れた。

23年度末には再び学習評価の枠組みを検討。24年度は期末考査を「総括テスト」に名称を改め、各学期の総括的なテストとして位置づけることも、テストの直前に扱った単元の単元テストを実施してもよいこととした。

「教務部で新しい学習評価の枠組みを作成し、先生方からの意見を基に修正を重ねてきましたが、評価方法については教科会に任せました。この2年半の経験から、教科・科目の担当者間で十分話し合っただけで評価規準を明確にすることが、観点別評価を実施する上でも重要だと感じました」（高谷先生）

### 単元終了後すぐではなく、半月後に単元テストを実施

単元テストは、各教科・科目でどのような検討が行われ、実施されているのか。喜多先生が担当する「簿記」では、担当教師が1つの単元が終わる度に集まって、それまでの授業と学習評価の実践を振り返り、改善策を話し合った。「簿記」では、生徒が数多く問題を解いて、知識・技術を身につけるといふ授業が中心でしたが、思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む

態度はどうすれば育めるのか、どのように評価すればよいのかをみんなで話し合ってみると、様々なアイデアが出てきました。その中のいくつものアイデアが単元テストに採用されました

喜多先生は、適切な評価方法を探るため、23年度、3回の総括テストで、その学期で扱った各単元から1大問ずつ出題。①総括テストの評価を該当の学期の評価材料の1つとして組み入れる、②各大問の評価を該当の単元の評価材料に組み入れるという2パターンで評価を出した。すると、②の方が生

図4 「簿記」の単元テスト(例)

**問** 下記の売上帳と仕入帳に基づいて、各日付の取引を考え、仕訳を示しなさい。勘定科目は次の中から適当と思われるものを選ぶこと。[現金、売掛金、買掛金、売上、仕入] (問題には売上帳、仕入帳がつく)



完成された帳票を見て、どのような取引があったのかを考えさせる問題です。条件が提示され、それに沿って帳票を作成する問題はよく出していました。が、帳票を読み解く問題は初めて出しました。取引の本質を理解し、多面的な視点で売上帳や仕入帳を分析できる思考力を育めるのではないかと考えました。

徒がどの単元でつまづいているのかを明確に把握できることが分かり、単元テストの意義に納得して推進できるようになった。

また、「簿記」の単元テストは、単元の終了時ではなく、単元が終了して半月後に実施している。

「22年度は、単元が終わるとすぐに単元テストを実施していました。正答率が非常に高いのはよかったです。ですが、日商簿記などの検定試験に向けては学んだことの定着が重要です。生徒が継続的に学習するよう、単元テストの実施時期をずらしました」（喜多先生）

高谷先生は担当科目の「情報処理」の単元テストで、オンラインアンケートツールを活用している。試験時間は10〜30分間。生徒がオンラインで解答を入力すると、自動的に採点して生徒に返却される。生徒はそれを見て、不正解だった問題を解き直す。また、自動集計機能によって表示される、クラス全体の平均点と設問ごとの正答率を基に、高谷先生はクラス全体で正答率が低かった問題を改めて解説するなどの指導をしている。

「テスト終了後すぐに正答率が表示されるため、ほかの生徒はできているのに、自分だけできていない問題があ

ると、生徒はそれを強く意識します。つまり持っている点を把握しやすく、危機感が持てるからか、授業後に質問に来る生徒が増えました」（高谷先生）

### 地域と連携した活動や資格取得も進む

商業の科目でよく実施される実技の評価は、以前の評価方法では平常点として組み入れていたが、今は1つの評価材料として扱っている。授業で学んだ知識・技術を活用して取り組む課題も出しやすくなった（図5）。

そうした流れを受けて、23年度からは2年次の学校設定教科「実学」で、「県

商マルシェ」を開催している。それは、4つの学科から生徒が集まってチームを組み、各学科の学びを生かした役割分担をして企画や商品選び、仕入れ、値段設定など、すべて生徒のみで取り組む販売実習だ。地域住民が大勢訪れる、地域の一大イベントでもある。

池田秀幸教頭は、新しい学習評価によつてスクール・ミッションに掲げる『地域経済の発展に貢献・活躍できる商業人材の育成』に向けた活動が活発になっていると語る。

「地元企業と協働したおにぎりの商品開発や、地元商店街の空き店舗での商品販売など、生徒は地域と連携した様々な活動に取り組んでいます。そう

した活動を授業に組み入れて評価することで、生徒はさらに意欲的に取り組むようになっていきます」

学校教育目標の1つである資格取得の推進においても、新しい学習評価がプラスに働いていると、喜多先生は感じている。

「2週間の定期考査期間がなくなったことで、検定試験に向けた学習が中断されることなくできるようになった上に、単元テストで基礎が定着し、パフォーマンス課題で思考力が培われるなど、生徒は着実に力をつけています。実際、22年度入学生の日商簿記2級の取得率は、21年度入学生よりも高かったです（図6）」

### 早期の個別支援が可能になり、欠点者が大幅に減少

学習評価と授業が変わり、教師の指導も変わった。喜多先生も高谷先生も、単元テストによつて生徒がどこでつまづいているのが把握しやすくなったことで、個別支援に力を入れている。

「以前は、学期末に欠点の生徒に補習をしようとしても、どこでつまづいているのかを生徒は自覚できておらず、効果的な指導ができていたとは言えない状況でした。ばん回するのを諦めようとする生徒もいました。今は、単元ごとにつまづいている箇所を把握でき、早めの支援ができるため、授業に全くついてこられない生徒は、ごく少数で、欠点者が減りました」（高谷先生）

単元テストだけでなくできてよい成績はつかず、課題や実技などで多面的に評価することを生徒に重ねて説明すると、課題の未提出はほぼなくなった。

「生徒に日常的に学ぶ姿勢が定着しつつあり、放課後に生徒同士で学び合う姿がよく見られるようになりました。今後、生徒の成長を支える評価方法を模索し、地域経済を支える人材を育てていきたいと思えます」（池田教頭）

図5 「簿記」の課題（例）

課題 営業利益を最大化する経営戦略的な観点から、製品データを基に販売利益計画を立て、最適なセールスマックス（\*3）を考えよう。

●製品データ

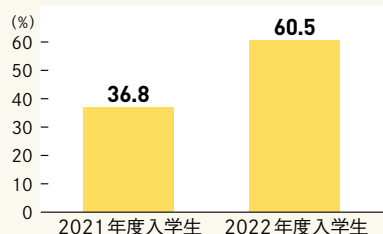
	ステーキ弁当	ハンバーグ弁当
販売価格	@ ¥1,200	@ ¥1,000
変動費	@ ¥840	@ ¥450
貢献利益	@ ¥360 (貢献利益率 0.3)	@ ¥550 (貢献利益率 0.55)
固定費	¥400,000	
販売総数	2,000食（1か月）	

損益分岐点や目標営業利益の計算だけでなく、制約がある中で最適なセールスマックスを考えるグループワークです。調理時間や優先して売りたい商品などを踏まえて考えさせました。

課題 コンビニエンスストアやスーパーマーケットにあるもので、会社の「費用」にあたるものは何か。

1年次の5月の連休中の課題として出しました。ある生徒は、「ウォーターサーバーは会社の『備品』だが、中の水は消費するものなので、『費用』にあたる」と解答しました。授業で学んだ知識を実践の中で捉えることで、本質の理解につながるのだと実感しました。

図6 日商簿記2級の取得率



2022年度入学生は現在3年生のため、今後も卒業までに取得者数はさらに増える見込み。  
※学校資料を基に編集部で作成。

\*3 製品の生産量と販売量の組み合わせのこと。



# 単元テストと伝統の実力考査で 高い目標の実現を支援

## 鹿児島県立鶴丸高校

鹿児島県立鶴丸高校は、開校以来4万6000人を超える人材を社会に送り出してきた全国屈指の進学校だ。同校では、学習指導要領で求められている観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実を実現するための手段の1つとして、すべての教科・科目で単元ごとの評価を実施し、定期考査を廃止することを決めた。2024年度からのその改革は、教師たちどのような思いと議論によって形づくられたのだろうか。

### 改革は観点別評価の議論から始まった

鹿児島県立鶴丸高校では、新学習指導要領の実施を受け、教育活動のさらなる充実を目指すため、2023年度、校長、教頭、そして各分掌・学年主任など、14人の教師から構成され、教育課程や教科指導のあり方、大学や研究機関などとの連携のあり方などを研究する「未来プロジェクト委員会」を発足させた。

未来プロジェクト委員会の議論のテーマは多岐に及んだが、23年度の議論において特に重要なテーマとなったのが、資質・能力を育む観点別評価のあり方だった。その議論は常に「鶴丸高校ではどのような生徒を育てるのか」

を出発点に行われたと、小島健志教頭は振り返る。

「鶴丸高校の3年間でどのような生徒を育てるのか。本校で学ぶ今の生徒の姿はどうか。学校を見守る県民は本校に何を求めているのか。14人のメンバーがそれぞれの考えや思いを語りました。忙しい中、貴重な時間を割いて集まるのだからこそ、評価方法などの各論から検討するのではなく、本質的なことから対話を始めました」

東京大学や京都大学、そして国公立大学医学部医学科など、最難関大学を進路目標に掲げて入学してくる生徒が多い同校では、志望校合格のための支援はこれからも変わらない重要な使命であるという点については、未来プロジェクト委員会のメンバー間で意見の



教頭  
**小島健志**  
こじま・けんし  
同校に赴任して3年目。



教師  
**渡辺豊隆**  
わたなべ・とよたか  
同校に赴任して2年目。



進路指導課主任  
**蓮香尚矢**  
はすか・なおや  
同校に赴任して10年目。地理歴史・公民科（世界史）。



進路指導課副主任  
**今門健作**  
いまかど・けんさく  
同校に赴任して4年目。数学科。

相違はなかった。しかし、日々の生徒の様子について語り合うと、「生徒は皆、すごく頑張っているけれども、多忙が原因で疲れている生徒がいるのも事実だ」「生徒は学校を信頼しているが、自分で学びの一步を踏み出す力の育成もこれからは重要だ」などと、課題も提示された。

### 学校概要

設立 1894（明治27）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約320人  
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、熊本大、鹿児島大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ130人が合格。

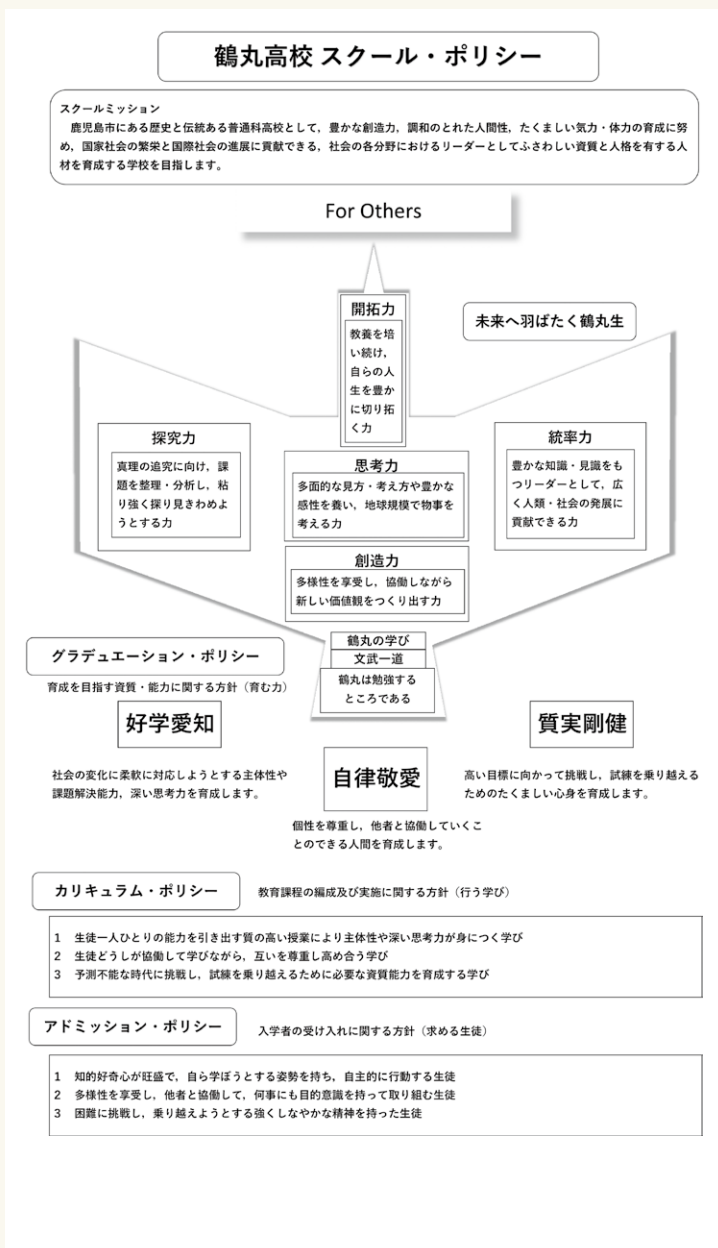
「私たちはスクール・ポリシー（図1）に立ち返りながら、開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力の5つの資質・能力を育む教育活動の実現のためにどのような改革が必要か、議論を重ねました。その結果、23年度の夏には、学校行事全般を精選する機運が高まっています」（小島教頭）

## スモールステップの意味を問い直す

23年度の秋には、未来プロジェクト委員会において、日常的に生徒が見通しを持って学習できる環境づくりと、指導と評価の一体化による学力の伸長及び進路目標の達成を目的として、単元や題材など、内容や時間のまとまりごとに評価の場面や方法をいかに充実させるか、議論のテーマが具体化していった。そして、ペーパーテストやレポート、発表など、多様な評価方法による単元テストの導入が相上り（せりあがり）に載せられた。

未来プロジェクト委員会のメンバーで進路指導課副主任の今門健作先生は、「生徒が自身の学習の到達度を単元ごとに確認し、その後の学習の進め方の改善に生かすことができる単元テストは、生徒の主體的な学び、そして

図1 鶴丸高校のスクール・ポリシー



※学校資料をそのまま掲載。

希望進路の実現に確かなつながる」と感じた。しかし、単元テストを用いたスモールステップによる評価を行うにつ、これまで同様に定期考査が実施されると、生徒の負担が増えてしまう。だからと言って定期考査の削減や廃止は、進学校での事例がまだ少ないこともあり、単元ごとの評価を行うことの大切さは理解できても、正直不安はあったと率直に語る。

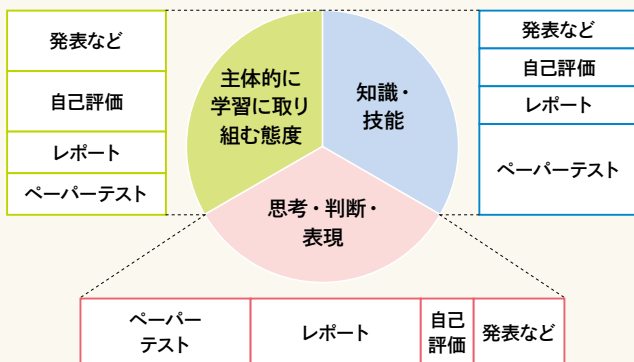
「それでも、最初から『できない』と否定するのではなく、どうすれば実現に近づけるのか、実行しながらよりよい形に変えていくことはできないかと、改善策や代案を挙げながら粘り強く考えるベテランの先生方の姿が印象的でした」（今門先生）

その後、未来プロジェクト委員会を中心に、定期考査を廃止した場合、定期考査期間に実施していた教員研修や

進路検討会などをどこで実施するのかといった懸案事項を、一つひとつ丁寧に議論していった。そして24年2月には、24年度から単元ごとの評価を充実させるとともに、定期考査を廃止することを生徒と保護者に発信した（図2）。渡辺豊隆教頭は、「定期考査の廃止は改革の方法に過ぎないことを丁寧に伝えた」と振り返る。

「単元テストによって、生徒はスモ

図2 生徒と保護者に伝えた評価の方法のイメージ図



※学校資料を基に編集部で作成。

図3 校内で実施する考査の変化

23年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	復習考査	実力考査(1年生・2年生)	前期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	前期期末考査	実力考査(3年生)	実力考査(全学年)	実力考査(3年生)	後期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	学年末考査	

24年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	実力考査(2年生・3年生)		実力考査(全学年)		実力考査(全学年)			実力考査(全学年)			実力考査(1年生・2年生)	

※学校資料を基に編集部で作成。

ールステップで自分の学習状況を把握することができ、その後の学習の進め方を改善するスパンが短くなること。ペーパーテストを含む多様な評価方法で単元テストを行うことで、一人ひとりの生徒の成長を丁寧に見取ることができ、支援すべき点が明確化しやすいこと。そのように、評価の機会が増え、その内容も充実するからこそ、定期考査の廃止に至ったのだと伝えました」「スモールステップ」という言葉の意味の伝わり方にも同校の教師たちは

気を配った。単元テストは定期考査に比べれば、狭い範囲を対象とした評価となる。しかし、学習の到達目標を下げることはいないため、スモールステップではあるが、出題内容のレベルは難関大学入試を目指すに値するものであることを、生徒と保護者に伝えたい。

その結果、生徒や保護者から、単元ごとの評価の充実に伴う定期考査の廃止について否定的な声が上がった。

### 新しい仕組みの中で改善を続けていく

24年度の同校の校内考査の実施内容は様変わりした(図3)。実力考査では校内偏差値や順位、度数分布を生徒に示すが、学習の到達度を確認する単元テストでは相对比较は行わない。どのような方法で観点別評価を行い、総合的評価が行われるのかを、生徒は各教科・科目が作成する単元シラバスで確認してから学習に取り組む。単元シ

ラバスには、全教科・科目共通の掲載項目があり、シラバス作成時にそれらの項目の記載漏れがないよう、チェックシートで確認している(P.18 図4)。単元テストの1日あたりの実施教科・科目数の上限などは教務課が中心となって検討しているが、生徒や教師の声に耳を傾けながら、自校に最も合ったスタイルに練り上げていく考えだ。

新しい環境への対応が求められる生徒の様子にも、教師たちは目を凝らしている。日々の学習で自走することができているか。その自走は希望進路の実現につながるものなのか。そうした点を教師が正確に判断するためにも、単元テストの精度が問われる。単元テストの内容の難易度が高すぎると、生徒は学習上の課題を自分で発見しにくくなる。単元シラバスでは、その単元の観点別の学習状況として、「おおむね満足できる」状況、つまり評価規準は明記されるが、その評価規準の設定を教師たちは重要視している。

「難関大学志望の多い本校の生徒に求める評価規準をきちんと設定することによって、単元の指導計画の焦点が絞られますし、単元テストの内容もおのずと見えてきます。単元シラバスと単元テストは、まさに授業改善と一体化したものです」(小島教頭)

単元テストでは校内順位など、相対的な成績が算出されることはないが、評価規程が確立された単元テストの結果を蓄積し、生徒が折に触れて参照できるようにすれば、その教科・科目における自身の伸びや課題を生徒が確認しやすくなるのではないかと、渡辺教頭は考える。

「生徒が単元テストの結果を記録し、振り返ることができるとシステムの構築を検討しています。今回のような大きな改革では、実践さえすれば終わりというわけではなく、工夫や改善を途切れさせないことが求められていると感じています」（渡辺教頭）

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

## 新しい一歩は 原点帰帰の一歩

全国屈指の進学校であるとともに、先駆的な改革を続ける鶴丸高校。未来プロジェクト委員会のメンバーだけでなく、全教師がこれからの自校のあり方について議論し、それぞれの考えを深めてきた。進路指導課主任の蓮香尚矢（はるか）先生は、「本校がこれまで追い求めてきた教育は、これからも不変の価値を持つていることを議論の中で確認することができた」と語る。

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

図4 シラバス作成時のチェックシート

- 教科名の表示がある。
- 科目名の表示がある。
- 単位数が表示されている。
- 対象が明示されている。
- 使用教科書が明示されている。
- 副教材などが明示されている。
- 学習の目標が掲載してある。
- 学習内容が掲載してある。
- 学習計画（進度表）が掲載してある。
- 評価の観点に掲載してある。
- 評価規程（「おおむね満足できる」状況に到達した姿など）が掲載してある。
- 評価方法が掲載してある。

・生徒に示すことで、生徒が計画的、主体的に学習できるような構成である。  
・学校のウェブサイトに掲載しても、学習内容や評価方法について保護者などから疑義を持たれず、説明を果たせる内容である。

※学校資料を基に編集部で作成。

鶴丸高校で育成を目指す生徒像は決して変わってはいないことを、スクール・ポリシーについて様々な先生方と話す中で気づきました。一方で、生徒の気質は変化しています。かつての本校の生徒は『人から言われなくても自ら学ぶことができる』と地域から評価されてきました。しかし、時代が進むにつれて、教師から『こうすればいいよ』と言われることを期待する生徒が増えてきたように思います。単元ごとの評価を通して自ら学習改善に取り組み生徒を育てることは、本校の原点帰帰の一歩なのかもしれません」

また、蓮香先生は、一連の議論を通じて、生徒の実力把握と教師の指導力向上という点での実力考査の重要性を実感したという。

「本校は実力考査の作問に力を入れており、例えば3年生の実力考査の問題は、教科団全員で約2か月かけて完成させています。その結果、実力考査の成績を基にした精緻な進路指導を実現することができています」（蓮香先生）

同校に赴任して4年目の今門先生は、「本校の教師は、実力考査の作問の場で先輩教師から作問に必要な視点を学び、指導力を高めてきた。その伝統も、希望進路を実現できる生徒を育

てたいという思いによって受け継がれてきた」と語る。

「今回の改革の目的が『多忙感』の解消だったとしたら、実力考査の実施回数も減らそうという声が出てきたかもしれません。そういった声が出なかったのは、改革の出発点が『どのような生徒を育てたいか』だったからであり、むしろ実力考査の重要性を皆が再認識したと思います」（今門先生）

渡辺教頭は、「大きな改革だったからこそ、先生方と熱い議論もあり、大切なことを確かめることもできた」と振り返る。

「議論の過程で一人ひとりの教師の考え方の違いも見えましたが、これまで通りでよいわけではないという向上心、そして生徒のためにもっとよい学校にしたいという思いは皆一緒であることを実感できたのは、何よりの成果でした」（渡辺教頭）

大きな可能性を持った生徒がそれぞれの力をより発揮できるような学校にバージョンアップするために、新しい一歩を踏み出した伝統校の教師たち。スクール・ポリシーに掲げる「開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力」を、教師自身が発揮している。

事例整理

# 自校の定期考査の 現状と課題についての 整理が議論の第一歩

**定期考査の廃止は「手段」に過ぎない**

事例では、定期考査の廃止決定に至るまでの経緯と、廃止決定後の改革を紹介した。廃止の理由や、その決断を支えた教師の思い・考えは様々であったが、すべての事例に共通していたのは、定期考査の廃止は観点別学習状況の評価を充実させ、目標と指導と評価の一体化を図るための「手段」に過ぎないとしていた点だ。各校が目指したのは、生徒が自身の学習に見通しを持ち、主体的に取り組み続けることができる学校づくり、そして教師が授業改善を続けながら、学校として育成を目指す資質・能力を、各教科・単元を通して着実に育む学校づくりだった。

単元テストだ。事例では、単元テストの実施によって、生徒にどのような力を身につけさせたいのか、そのためにはどのような授業と評価を行うのかが議論され、見通しを持って各単元の授業を開始するようになったことや、単元ごとの評価を行うことで評価方法の引き出しが増え、それまでは見逃していた生徒の資質・能力を発見することができるようになったことなどが、現場の教師から語られた。

しかし、定期考査の廃止が目的ではない限り、定期考査そのものを改善することで、目標と指導と評価の一体化を図る選択肢もあるだろう。定期考査の問題の質や評価への生かし方を見直し、生徒が自身の学習状況を把握できるようにすることは、定期考査の存続・廃止の議論を待たずして取り組むべきことではないだろうか。定期考査は必要か、その答えは、各校における学校づくりの議論の先にある。

図 定期考査で生じやすい問題と、その解決の糸口

	定期考査の特徴	生じやすい問題	解決の糸口
評価の目的	総括的評価	定期考査の成績で評定が左右される	評定における定期考査の成績が占めるウェートを見直す
評価する資質・能力	主に知識・技能、思考力・判断力・表現力	ペーパーテストによる評価のため、知識・技能中心の評価となりやすい	定期考査以外の多様な評価方法を取り入れる
実施体制	全校または学年で一斉に実施	日々の学習の積み重ねではなく、一夜漬けの学習で臨む生徒が生まれやすい	単元テストなど、教科・科目ごとに高い頻度でテストを行うことで、日々の学習の積み重ねを促す
実施期間	3日～5日間程度 (実施前の一定期間は部活動などは停止)	授業だけでなく、部活動や探究学習などの校外学習、資格・検定試験対策が中断される	全校または学年で一斉に実施しないようにすることで、テスト期間を設けない
実施回数	年3～5回	考査間の空きが長く、生徒の学習上の問題点を発見しにくい。1回の考査の結果が評定を大きく左右し、成績の挽回が難しい	単元テストなど、高い頻度でテストを行うことで、学習上の問題点を見つけるとともに、その後のテストで挽回しやすくする
出題内容	授業で学習した内容 (複数の単元にまたがることも)	出題範囲が広いいため、生徒は復習し切れなかったり、受けっ放しになったりすることがある。単元の途中までが出題範囲となることがあり、単元ごとの評価が実現しづらいことも	単元テストやパフォーマンス課題などで、単元・題材等のまとまりごとに評価する
評価結果の利用方法 (生徒)	今後の学習改善	出題範囲が広いいため、生徒が自身の学習上の問題点を把握しづらく、学習改善に生かしくにくい	単元の指導計画やルーブリックを通じて学習目標を共有し、単元テストのようなスモールステップの評価を行うことで、生徒自身の学習状況の把握と学習改善を支援する
評価結果の利用方法 (教師)	今後の授業・指導改善	定期考査の結果が評定や校内順位を決めるためのものにとどまり、授業・指導改善の材料として生かされないことも	単元ごとの指導計画やルーブリックを作成し、授業とテストの目的をすり合わせ、テストの結果を授業・指導改善につなげる

※事例の内容も踏まえて編集部で作成。

# 「よいテスト」は、 生徒と教師をつなぐ

## 学びのコミュニケーションツール

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授

**石井秀宗**  
ひでとき

学校現場において、テストはなくてはならないものとして存在してきた。しかし、テストはどのように作られるべきか、「よいテスト」とはどのようなものかを考える機会は少なかったのではないだろうか。生徒の学習や進路に大きな影響を与えるテストのあり方について、テスト研究の専門家に聞いた。

### 「よいテスト」を作るための 要件を知ることが大切

日本テスト学会では、テストとは「能力、学力、性格、行動などの個人や集団の特性を測定するための用具であり、実施方法、採点手続、結果の利用法などが明確に定められているべきもの」と定義しています。ひと口にテストと言っても、何を測定するのか、どのように実施、採点するのか、その結果をどう利用するのかは様々です。

めには、目的、作成、実施、採点、運用など、様々な観点で検討することが必要です（P21図1）。担当教科・科目に関する高度な知識・技能ももちろん必要ですが、それだけでは、授業で育成した資質・能力を正確に測定し、結果を適切に解釈・運用できるテストは作ることができないのです。

学校で行われているテストには、次のような問題点が見られると言われます。まず、学習の目標に到達しているかどうかを評価するためのテストでありながら、平均点が非常に低くなって

**いしい・ひでとき** 東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。大学入試センターやアメリカ・ミネソタ大学でテスト研究に取り組む。2015年より現職。研究領域は、教育測定学、計量心理学（心理統計学）、データ科学。研究テーマは、テスト開発、項目作成ガイドライン作成、データサイエンス教育、入試研究など。「不出来なテストをなくすこと、テストをより良質なものにすること」を目指し、解答データに基づいた問題分析や、問題作成に関する研究に取り組んでいる。

図1 「よいテスト」の要件

●目的が明確であること

- テストで測りたい能力は何か
- その能力を測ることに意義はあるか
- 何を問えば、その能力を測定できるか
- 測るべき能力に含めるもの／含めないものは何か

●適切に作成されていること

- 測るべきものが測れるようになっているか
- 受検者集団に合ったテストになっているか
- テスト仕様書・ブループリントを作成する (P.22 図3、図4)
- テスト問題作成ガイドラインを利用する
- 声に出して読んでみる
- 忘れた頃に見直す

●適切に実施されていること

- 測るべき能力以外の要素が得点に影響していないか
- テストの目的や評価方法を受検者が理解しているか
- 受検者が適切な応答をしているか

●正しく採点されていること

- 採点基準が合理的なものになっているか
- 正答、誤答の根拠が明確に示されているか
- 採点者が採点基準を理解しているか
- 採点基準に従って採点されているか

●適切に運用されていること

- 結果は理にかなったものになっているか
- 公平公正な解釈、運用をしているか
- テストの目的は達成されているか
- 拡大解釈、過度な一般化、目的外利用をしていないか

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

しまっているケースです。平均点が低すぎると、生徒一人ひとりが目標に対してどこまで到達しているのか、目標までの距離はどのくらいなのかを個別に判断しにくくなります。そもそも目標に準拠した評価であれば、目標に到達した生徒は全員100点でもよいはずです。「全員100点だと生徒が安心して勉強しなくなる」といった心配を抱くかもしれませんが、それは設定した目標が低すぎたということです。優秀な受検者を選抜するためのテストなのか、受検者一人ひとりの学習状況を評価するためのテストなのかによって、テストの作り方は変わります。

測るべきものが測れていないテストもあります。教科書の素材文をそのまま使って空所補充をさせるテストで測っているのは、学んだことを生かして思考する力でしょうか。空所補充問題を出してはいけないということではありませんが、測りたい力を測れているかどうかは確認すべきです。

問題形式の吟味も重要です。「選択式問題はまぐれあたりがあるから、記述式問題にすべき」と考える人もいますが、必ずしもそうとは限りません。記述式問題は問題数が少ないことから1問あたりの配点が高くなりがちで、選択式問題以上に、いわゆるヤマのあたり外れの影響が大きくなります。また、記述式問題の解答の採点は、採点者の主観によって、評価がぶれる可能性もあります。一方、選択式問題は1問あたりの解答時間が短いため、広い領域から多くの問題を出すことができ

テスト作成のための3つのツール

では、「よいテスト」は、どのような手順を踏めば作ることができるのか。ここでは、「テスト仕様書」「ブループリント」「テスト問題作成ガイドライン」の3つのツールを使った手順を説明します。

テスト仕様書は、どのような特性のテストを作成するかという具体的なイメージをまとめたものです (P.22 図3)。目的や対象者、測定する領域や

資質・能力、さらに解答形式や問題数を考え、それらを記述します。ブループリントは、テスト仕様書に基づいたテスト作成の前の青写真です (P.22 図4)。学習した内容を通じて育成を目指した資質・能力を偏りなく測定するためには、測定する観点ごとに

出題する単元や問題数を適切に調整することが必要です。

そのように、テストを作成する際には、テスト仕様書やブループリントの作成を通じた検討を重ねてから作問を開始します。何となく問題を作り始め、

図2 選択式問題と記述式問題の比較

選択式問題の強み

- 1問あたりの解答時間が比較的短い
- 多くの項目を出題できるため、広い領域をバランスよくカバーできる
- 多くの項目を出題できるため、合計点に対する1問あたりの影響が小さい
- 採点が客観的、公平に行える
- 採点が短時間で可能

記述式問題の強み

- 記述内容から多くの情報を得ることができる
- 解答のヒントとなる情報を与えにくい
- 当て推量で正解になることはまずない
- 思考過程が限定されない
- 記述力・表現力を評価できる

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

途中で問題数や出題形式を調整してしまつと、出題者が作りやすい問題ばかりのテストになりかねないからです。

テスト仕様書やブループリントの作成の段階で複数の教師が確認することで、より精度の高いテストを作ることができます。若手の教師が作成したテスト仕様書などをベテランの教師がチェックすることで、「よいテスト」を作成する力を組織的に高めることができるでしょう。

とは言え、多忙な現場の先生方が、定期考査や単元テストを実施する度に、テスト仕様書やブループリントを作成するのは現実的ではないかもしれませぬ。そこで年に一度でもよいですから、経験豊かな教師とキャリアの浅い教師が、一緒にテスト仕様書やブループリントを作成し、検証してみてください。そうすることで、目的や測定する資質・能力、問題形式など、ブレがあつてはいけないテスト作成のポイントについての理解が深まり、その後のテストの質が変わってくるはずです。

## テストによって 良問・悪問が変わる仕組み

テスト仕様書やブループリントが完成したら、いよいよ作問に入ります。

図3 テスト仕様書

項目	設定内容
テストの目的	1学期末の定期考査（総括的評価の材料とする）
対象者	高校3年生（「化学」履修者）
測定する領域	「化学」の授業で扱った以下の単元 「化学基礎」全範囲、物質の状態と平衡、物質の変化と平衡
測定する資質・能力	知識・技能：用語記述など 思考力・判断力・表現力：事象の説明など
解答形式	短答式、論述式
所要時間	50分
問題数	30問
実施方法	用具：紙筆式 形態：集団実施
必要機材	特になし
採点のルール	短答式問題は1問3～4点、正誤評価 論述式問題は1問4点、段階評価
結果の利用法	教師：総括的評価の材料にする 生徒：1学期の学習の振り返りに活用する
留意事項	ノート・教科書等の持ち込みは不可

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

その際、テスト問題作成ガイドライン（P.23図5）の活用をお勧めします。

テスト仕様書やブループリントはテストの全体構成を定めるものですが、テスト問題作成ガイドラインは、ひとつひとつの問題が適切なものであるかどうかをチェックするための観点を一覧にしたものです。

テスト問題作成ガイドラインを見る際に注意していただきたいのは、示された指針や指標はすべて守らなければいけないものではないということです。テストの目的や測りたい資質・能力などを総合的に検討し、ガイドライ

ンで示されたどの項目を重視するかは、都度判断します。

例えば、大学入学共通テストでは、複数のテキストの中から必要な情報を素早く読み取ることを求める問題が出されています。そうした問題をテスト問題作成ガイドラインを基にチェックすると、該当の教科・科目の学力だけを測る問題であるとは必ずしも言えないかもしれません。しかし、情報を取捨選択する力など、様々な資質・能力をテストが測定しようとしているのであれば、そのような目的の問題としての意義を持つこととなります。また、

図4 ブループリント（テストの青写真）

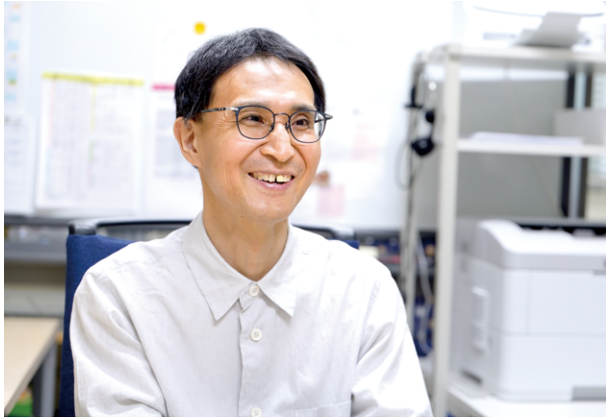
項目	設定内容		小計
	知識・技能	思考・判断・表現	
「化学基礎」全範囲	12	2	14
物質の状態と平衡	6	2	8
物質の変化と平衡	6	2	8
小計	24	6	30

※石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

大学進学を希望する生徒が多い学校では、現状の大学入試で出される問題の傾向を踏まえて校内テストの問題を作成することも多いと思います。

このようなことから、テスト問題作成ガイドラインで「logP（悪問）」としている問題をあえて作り、本来測ろうとしている教科・科目の力以外の力を測ることも現実には起こりえます。ただその際にも、「この問題で測ろうとしている力は何か」を見極めて、テスト結果を基に生徒に学習改善の助言を行ったり、自身の授業改善につなげたりすることが重要です。





**テストは生徒と教師をつなぐ  
コミュニケーションツール**

テストでどのような問題を教師が出すか、そして生徒がそれにどう解答するかは、授業という時間をともにした教師と生徒との「学びのコミュニケーション」だと私は考えています。出題者である教師の意図が正しく受検者である生徒に伝わるのが、テスト中はもちろん、テストに至るまでの授業の場面においても重要です。

教師の意図が正しく伝わるテストを作成するために、テスト仕様書やブル

**図5 テスト問題作成ガイドライン**

**問題の内容**

- 問いたいことは何か、問題を解くために必要な能力は何かが明確であること
- 重要な事柄を問うこと。些末なことや一般的過ぎる問いにならないこと
- 正解が問題作成者の価値観に左右されるような問いにならないこと
- 特定の個人や集団に有利、または不利な内容にならないこと
- ひっかけ問題にならないこと
- 高次の能力を測る問題では、受検者にとって新奇な素材を用いること

**問題の形式**

- 測りたい能力に見合った問題形式を用いること
- 前の問題に対する解答が、後の問題の正誤に影響しないこと
- 「あてはまるものをすべて選べ」という設問は避けること。使う場合は部分点を与えること
- 読解力や思考力を測る記述式問題では字数制限を設けないこと

**問題の記述**

- 言語レベルを受検者集団に合わせること
- 教示文・本文・設問・選択枝(\*)・図表などの記述量を必要最小限にすること
- 教示文・本文・設問・選択枝・図表などの文言をよく校正すること。ほかの人にも確認してもらうのが望ましい
- 教示文・本文・設問・選択枝・図表・解答欄などのレイアウトや大きさを適切にすること
- 特に低学年の児童に対して、選択枝は行を変えて1つずつ並べること
- 空所補充問題について、文意が分からなくなるほどの空所を設けないこと

**設問部分**

- 問いたいことは何か、どのような形式で解答したらよいかを明確・簡潔に書くこと
- 本文や選択枝などのほかの部分を読まなくても、設問部分だけで何を問われているかが分かること
- 否定表現を使わないこと。もし使う場合は、太字やアンダーラインで強調すること
- 一部の受検者にしか分からないような暗黙の前提を用いないこと

石井教授らが作成した「テスト問題作成ガイドライン」は、「問題の内容」「問題の形式」「問題の記述」「設問部分」のほかに、「選択枝」「記述式問題の採点」についてもチェック項目を設けている。石井教授の研究室のウェブサイトでは、すべてのチェック項目と問題の修正例(下図参照)が見られる。  
[https://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~ishii-h/test\\_guideline.html](https://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~ishii-h/test_guideline.html)



**■ ガイドラインに基づく問題の修正例(「あてはまるものをすべて選べ」という問題を修正した例)**

Bad	Good
<p><b>Q.</b> 以下の選択枝の中から、金管楽器にあてはまるものをすべて選びなさい。</p> <p>A. トランペット B. フルート C. ホルン D. トロンボーン E. サックス</p> <p>正答: A、C、D (すべて合っている場合のみ得点を与える)</p>	<p><b>Q.</b> 以下の各楽器について、金管楽器ならば○、金管楽器でなければ×をカッコ内に書きなさい。</p> <p>A. トランペット ( ) B. フルート ( ) C. ホルン ( ) D. トロンボーン ( ) E. サックス ( )</p> <p>正答: ○、×、○、○、× (正解数と得点: 5(2点)、4、3(1点)、2、1、0(0点))</p>

Badの問題では、すべて選べているかどうかという精度の低い評価となり、受検者の能力を適切に反映しにくい。また、そのような問題形式は受検者を不安にさせ、受検者が能力を十分発揮できないという懸念もある。そこでGoodでは、各選択枝を二値評価する問題に修正することで、測定の精度を高めている。

\* 石井教授の提供資料を基に編集部で作成。

プリント、テスト問題作成ガイドラインを活用していただきたいです。その際は、ぜひ校内の先生方とコミュニケーションを取りながら取り組んで

いただきたいと思います。例えば自分が作成した問題を、テストを実施する前にほかの先生に見てもらい、意見を聞いてみてください。作問に関するこ

とはもちろん、授業のあり方やテスト結果の評価の方法など、いろいろな点での気づきを得られるはずですよ。

\* 本記事では、日本テスト学会の表記に従って「選択肢」を「選択枝」と表記している。

奈良県立橿原高校 普通科・3年生  
松田昇太郎

奈良県立商業高校 会計科・3年生  
北村桃佳



岩手県・私立専修大学北上高校 普通科・3年生  
六串海遥

VIEW next編集部 統括責任者  
柏木 崇

# 私たちにとって「テスト」とは

テストが生徒と教師の「学びのコミュニケーションツール」であるならば、定期考査の廃止と単元テストの実施は、そのコミュニケーションのあり方によどのような影響を与えるのだろうか。単元ごとの評価に移行している3校の生徒が、定期考査のなかった高校生活を振り返りながら、卒業年次生として思う「テストの意義」について、VIEWnext編集部統括責任者の柏木崇と語り合った。

## 最初は戸惑った単元テスト。次第に学習習慣が身についてきた

**柏木** 皆さんは、定期考査を廃止して単元テストを実施している高校でこれまで学んできました。3人とも中学校時代は定期考査があったそうですが、高校で定期考査がなくなったことで、日々の学習への取り組み方は変わりましたか。

**北村** 高校に入学して最初のうちは、単元ごとにテストが行われることに戸惑いました。でも中学校の時のように、定期考査の直前に一夜漬けで勉強するよりも、単元ごとに理解度を確認した方が、授業で学んだことが自分の力になっていると、次第に感じるようになりました。今は単元テストに合わせて毎日計画的に勉強しています。

**松田** 単元テストになったことで、テストの回数自体は多くなって、最初のうちは負担に感じたこともありましたが、でも徐々に慣れてきて、中学生の時よりも家庭学習の時間が少しずつ増えていきました。

**六串** 部活動で遅く帰宅した翌日に単元テストがあ

った時は、大変だと感じたこともありましたが、でも、単元テストは定期考査に比べて出題範囲が広くないことに着目し、隙間時間を有効活用しようと考えました。スマートフォンなどを使ってこまめに勉強したところ、単元テストは苦ではなくなりました。

**柏木** 単元テストのよいところを教えてください。

**松田** テストの実施回数が多いので、1回のテストの結果が悪くても、2回目、3回目のテストで挽回ができるからです。

**六串** 私の高校では、同じ単元の単元テストに再チャレンジすることがあります(P.457参照)。例えば、単元テストの前日まで部活動に時間が取られてしまっても、その単元テストで納得のいく成績が取れなくても、再チャレンジして成績を更新することが出来ます。部活動も勉強も頑張りたい自分には、とても合っていると思います。

**北村** 定期考査のように、短期間にいろいろな教科科目を勉強しなくてよいところが、自分は勉強しやすくいいなと思っています。

**柏木** 反対に、単元テストについて「ここはちょっと

と……」と感ずるところはありますか。

**松田** 単元テストに合わせた勉強の習慣がなかなかつかなくて戸惑った人はいます。先生にアドバイスをもらったり、友人と一緒に勉強したりして、早く慣れることが大事なのかなと思います。

**六串** 単元テストが1日に複数回ある時は、定期考査と同じように大変だと感じることもあります。

**柏木** 定期考査の方がよかった点はありませんか。

**六串** 中学生の時に、「定期考査で〇位以上だったらお小遣いをちょうだい」と母にお願いしたり、仲のよいクラスメートと競い合ったりしたのは楽しい思い出です。

**北村** 単元テストは自分との勝負で、定期考査は点数や順位を人と比べやすいテストだと思います。

### テストは

### 夢や進路の実現を支えてくれるもの

**柏木** 3人とも学習習慣が身につけているようですが、それは単元テストのおかげですか。

**六串** 単元テストよりも、模擬試験が終わった後などに行われる先生との面談の方が影響は大きいです。個人帳票の具体的な数字を見ながら、「化学のこの単元は応用力が身につけていないね」などと先生に教えてもらうことで苦手な単元に気づき、該当の単元テストに再チャレンジして、苦手が克服できたかを確認しようという気持ちになります。

**松田** 先生の声かけは大きいと僕も思います。高校生になって少しずつ家庭学習の時間が増えていったのは、先生が折に触れて「疲れていても、10分、20

分でもいいから毎日勉強することが大事だよ」と声をかけ続けてくれたからだと思います。

**北村** みんなで勉強する環境があることも大事だと思います。私の学校では放課後、友人と協力しながら簿記の勉強に取り組める環境を先生たちがつくってくれています。私の場合、勉強のやる気の一番の源は公認会計士になりたいという夢で、そのやる気を、友人と励まし合いながら維持しています。

**柏木** 定期考査が単元テストになればよいというわけではなく、勉強のやる気を高めるために大事なものはまた別にありそうですね。では、皆さんにとってテストとはどういう存在なのでしょう。

**北村** 私にとってテストは、夢の実現を支えてくれるものです。テストを受けた時点での自分の力を把握し、夢に近づいていることを実感できるようなテストであってほしいです。

**松田** 僕も単元テストや模擬試験で今の自分の力を知ることができています。でも、大学入試本番に向けて、不安も少しずつ大きくなってきています。

**六串** 大学入試のことは、私も不安です。だからこそ、学校のテストが自分の不安を少しでも解消してくれるものであったらいいと思います。「学校のテストでよい成績を取れたのだから、本番のテストもきっと大丈夫」と、自分の実力に自信を持って入試本番に臨むことができるのではないかと思います。

**柏木** 希望進路を実現するためのテストがあつて、その一番大切なテストに対する不安を、先生や友人とのかかわり、そして学校で受ける様々なテストを通して、少しでも軽減できたらいいですね。皆さん、進路実現に向けて、引き続き勉強、頑張ってください！

### 本特集を振り返って

### 定期考査の「存続」「廃止」の結論ありきではない議論を

本特集では、「定期考査は必要か」「その答えは、どのような点を考えれば出るのか」といった問いを立て、定期考査の見直しに関するデータや事例、テスト研究の専門家へのインタビュー、そして高校生との対話を通じて考えてまいりました。

後者の問いについては、「定期考査は何のために実施するのか」「その目的を果たすものになっているか」といった、自校の定期考査の目的の確認と現状の把握が答えの1つだと考えます。3つの事例でも、自校で育てたい生徒像や育成を目指す資質・能力の共通認識を図るところから議論は出発し、その目的を果たすための手段の1つとして、定期考査の廃止という結論に至っていました。自校の定期考査の目的や現状を考えることで出る、前者の問い「定期考査は必要か」の答えは、スクール・ポリシーや学校を取り巻く環境（教員数・生徒数、生徒の気質や学力の状況等）によって異なってくる、すなわち、「存続」「廃止」どちらの結論もあり得ると考えます。だからこそ、結論ありきではない、学習評価の本質に立ち返った議論を、校内で実施していただきたいと思います。



VIEWnext 編集部  
統括責任者  
**柏木 崇**

主体的・  
対話的で  
深い学び

授業実践

国語

深い思考につながる負荷を生徒にかけ、  
じっくり考えて学ぶ姿勢を育む



宮城県涌谷高校

根元 学 ねもと・がく

同校に赴任して4年目。教務部長。国語科。



学校概要

◎設立 1919 (大正8) 年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年 120 人

◎2023 年度卒業生進路実績 国公立大は、室蘭工業大に1人が合格。私立大は、石巻専修大、東北学院大、東北福祉大、宮城学院女子大、十文字学園女子大に延べ7人が合格。短大・専門学校進学 21 人。就職 46 人。

私が  
目指している  
授業

常勤講師として勤めた高校では、例えば評論なら、私が素材文の論展開を説明し、生徒はそれをノートに写すといった講義型の授業をしていました。しかし、生徒はつまらなそうで、授業後にレポートを書かせても、考えが深まっているようには見えませんでした。そこで、生徒の思考力を育む手法を模索し、前任校では周りの先生方に助言をもらいながら、対話的な授業形態を研究しました。本校では、学習に対して自信がなく、他者との対話が苦手な生徒が少なくありません。そのため、生徒の発言を私が肯定的に受け止めたり、失敗を恐れずに自分の考えを発言できるような「協働学習のあり方」を生徒自身に考えさせたりすることで、対話の活性化に努めています。

# 授業レポート

## 本時の概要

- [対象] 1年生 [教科・科目] 国語・現代の国語  
[単元] 平野啓一郎『「本当の自分」幻想』  
[単元目標] 論展開を把握し、筆者の主張に対する理解を深める。  
[授業時数] 全6時間のうちの5時間目  
[本時の目標] 榎本博明『鏡としての他者』と前時までに学んだ「分人主義」(\*1)とを比べて、両筆者の主張の共通点を考える。



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

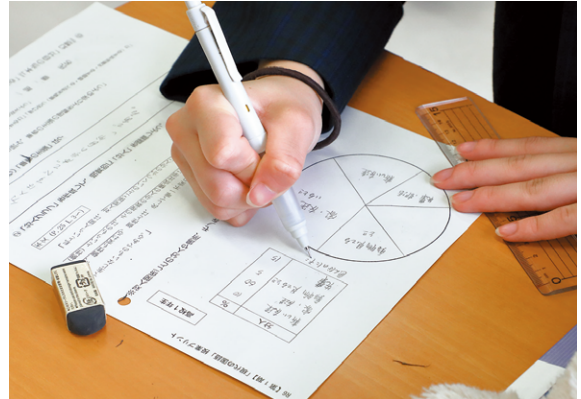
担任

## 1 本時の課題の提示、前時の振り返り 5分間



本時は、本単元の素材文をより深く理解するために、別の素材文を読んで、両筆者の主張を比較すると、根元先生が説明。前時までに読解した本単元の素材文の内容をペアで振り返り、ワークシートに記入した。そして、根元先生に指名された生徒が、「筆者の主張は『分人とは本当の自分である』」と答えた。

## 2 「分人グラフ」を作成 15分間



素材文の一部を音読した後、自分に影響を与えている他者や所属の構成比率を表す「分人グラフ」を作成。生徒が自分の分人を視覚的に整理し、筆者の主張を追体験することで、筆者の主張に対する理解を深めることがねらいだ。グラフの作成のヒントとして、根元先生は自分の高校時代の分人グラフを投影した。

## 3 他の素材文を読解 20分間



生徒は、榎本博明『鏡としての他者』の一部を読み、文中にある「自己とは他者である」の意味を考えた後、自分の考えをペアで共有した。根元先生が、「筆者の主張はどこに書かれていることが多いんだっけ？」などと問いかけると、前時の内容を思い出し、答えにたどり着いた生徒もいた。

## 4 他の素材文との読み比べ 10分間



最後に、生徒は2つの素材文の共通点を考えてワークシートに記入。根元先生は黒板に「〇〇が必要」と書き、「〇〇には何が入る？」と問いかけた。その問いを手がかりに、「分人や自己イメージの決定には『他者』の存在が必要」などと追記する生徒もいた。授業後、生徒は振り返りシートを提出した。

\*1 分人主義は、平野啓一郎氏が提唱する説。「本当の自分」は1つではなく、相手やコミュニティによって変わる複数の人格をすべて「本当の自分」と捉える考え方。

発問・課題設定の観点

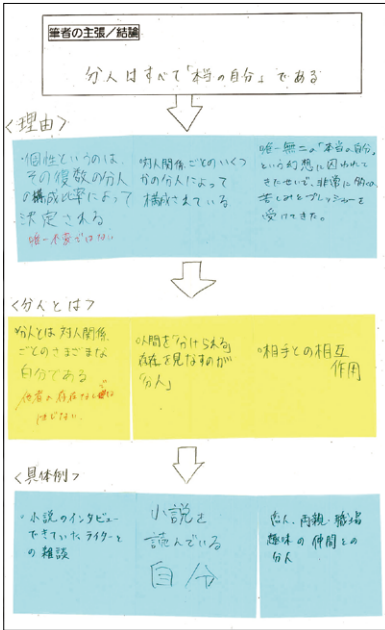
論展開の図式化や  
他の素材文との比較などで  
読解を深める



授業では、私からの説明は最小限にし、生徒が自分で考える課題を多く設定しています。例えば、本時の前までは、素材文の「筆者の主張・結論」「理由」「根拠」「具体例」といった要素を整理する「論展開図」(図1)を作成しました。素材文の要約よりも論展開を図式化する方が、生徒がより読解を深められると考え、よく取り組ませています。

図1 論展開図 作成の流れ

- 1 [個別学習] 素材文を通読して、「筆者の主張」と「論展開」を捉える
  - 2 [協働学習] ①で考えたことを3~4人のグループで1つの論展開図にまとめる
  - 3 [共有] ②の内容を全体に発表する
- グループで作成した本単元の論展開図(例)



※学校資料をそのまま掲載。

ば、グループワークの前には必ず個人で考える時間を設けています。また、自分の考えを書けない生徒にはヒントを出します。本時では、「筆者の主張はどこに書かれていることが多いんだっけ?」と問いかけたところ、前時に学習したことを思い出して答えにたどり着いた生徒もいました。本時のように、教科書に載っている素材文とは別の素材文を用いて、両筆者の主張を比較する活動もしばしば行っています。別の視点から教科書に載っていない素材文を捉えて、より深く読解できるようにするためです。例えば、『骨とまぼろし』(2)の単元では、世界情勢に関するニュース記事を読み、異文化理解について考えさせました。

学習評価の工夫

A評価に満足せず、  
考えを深められるような  
コメントを書いて返却



知識・技能は定期考査、思考・判断・表現は論展開図やワークシートなどのパフォーマンス課題、主体的に学習に取り組む態度は2コマに1回程度書く振り返りシートなどを材料にして、各観点の評価をしています。

パフォーマンス課題と振り返りシートは、それぞれのルーブリック(図2)を使って、まずは生徒が自己評価をします。その際、自己評価がA評価でも、「なぜ、そう考えたの?」「ここをもっと深めてみよう」などとコメントを書き、生徒がさらに掘り下げて考えられるようにしています(図3)。また、自己評価と教師の評価にずれがある場合には、なぜ教師がその評価をしたのか、ルーブリックを基に考えるよう、声をかけています。そして、コメントや声かけを踏まえて書き直し、再提出した生徒には加点をしています。

図3 生徒の振り返りシート(記入例)

① 本次の振り返り	② 他者と全くと関わり	③ 他者と全くと関わり
今回の振り返り 自分と他者の関係 自分と他者の関係 自分と他者の関係	他者と全くと関わり 自分と他者の関係 自分と他者の関係	他者と全くと関わり 自分と他者の関係 自分と他者の関係
振り返りの評価 A B C	振り返りの評価 A B C	振り返りの評価 A B C

※学校資料をそのまま掲載。

図2 パフォーマンス課題のルーブリック(抜粋)

	主張/結論を捉えられているか	論理的な説明になっているか	分かりやすい体裁になっているか
A	筆者の主張もしくは結論を適切に捉えられている。	筆者の主張もしくは結論を導く理由や根拠、具体例を論理的に説明できている。	誤字脱字がない。 表現が正しく、読みやすい文章である。
B	筆者の主張もしくは結論を部分的に捉えられている。	筆者の主張もしくは結論を導く理由や根拠、具体例を論理的に説明できているが、論理的でない部分がある。	誤字脱字が少ない。 表現が正しく、比較的読みやすい文章である。

ルーブリックはA~Cの3段階で作成。

※学校資料を基に編集部で作成。

\* 2 真木悠介『気流の鳴る音 交響するコミュニケーション』(筑摩書房)より。本書では、コミュニケーション構想のための比較社会学について触れている。



## 1年次に生徒に考えさせる「協働学習のあり方」

### ●自分で作る基準だからこそ、意識し続けられる

本単元の最後の授業に、『『よい』『悪い』ペアワーク・グループワーク』について考える課題を出しました。入学して間もない5月に、生徒が自分でよいペアワーク・グループワークの基準を作り、授業に臨む心構えを持たせることで、これからの高校3年間の授業を通じて成長していけるようにすることがねらいです。

生徒の多くは、4月からの授業での私の声かけを通じて、どういったペアワーク・グループワークがよいものなのかを、ある程度理解しているようでした。しかし、教師が提示するペアワーク・グループワークに対して当事者意識を持ち切れず、議論の途中で考えるのをやめてしまったり、程々の解答で満足してしまったりする姿が見られました。そこで、よいペアワーク・グループワークの基準を自分で考え、明文化することで、生徒がペアワーク・グループワークをよりよい活動にしようとする意識を持ち続けるのではないかと考えました。

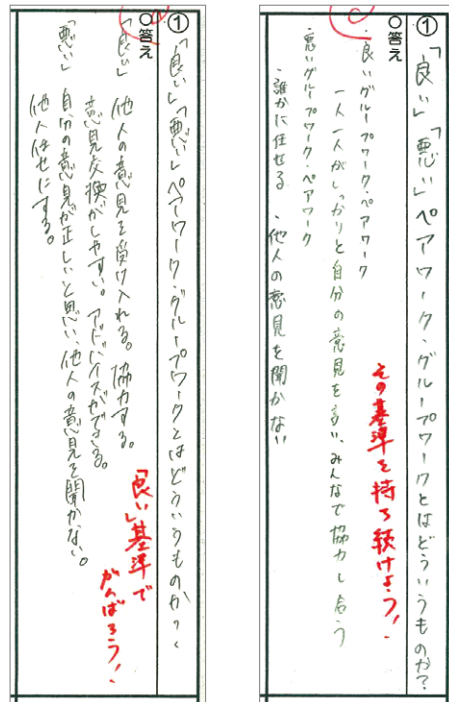
### ●2学期の途中に基準を見直す

生徒が考えたよいペアワーク・グループワークの基準には、「意見交換ができる。アドバイスがしやすい」「一人ひとりが意見を言って、みんなで協力し合う」といったことが、悪いペアワーク・グループワークの基準には、「自分の意見が正しいと思い込み、他者の意見を聞かない」「人に任せてしまう」といったことが書かれていました(右図)。ペアワーク・グループワークが停滞した時などは、自分で決めた基準を振り返るよう、声かけをしようと考えています。

授業に慣れてくると、自分で決めた基準を忘れてし

まう生徒も出てくるでしょう。また、ペアワーク・グループワークを数多く経験した生徒の中には、「もっとよりよい活動にするためにこうしたい」といった思いを持つ生徒もいるかもしれません。そのため、2学期の途中に基準を見直す機会を設ける予定です。

### ■生徒が考えたよいペアワーク・グループワーク



高校に入学して約1か月間の授業で取り組んだペアワークやグループワークを振り返り、生徒それぞれが、自分が考える『『よい』『悪い』ペアワーク・グループワーク』を書いた。

※学校資料をそのまま掲載。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

成果と展望

自分で疑問を  
持つて  
考えを深められるように



2023年度の卒業生は1年次から3年間受け持ちました。入学当初は学習意欲があまり見られず、教師の指示通りに行動するだけでした。そこで主体性を育もうと、グループワークや振り返りの大切さを説明し、繰り返しそれらに取り組みさせました。すると次第に論理的に考え、多角的に物事を捉えることが増え、自ら疑問を持つて考えを深められるようになりました。その効果もあってか、9年ぶりに国立大学合格者が出たことは、私にとつて自信になりました。今年度受け持つ1年生も、卒業までに自分で考えを深める力がつくよう、授業に探究学習を取り入れたと考えています。希望進路の実現に向けてどんな力が必要なのか、その力はどうすれば身につくのか、生徒自身が考えられるようにしていきたいと思っています。

主体的・  
対話的で  
深い学び

授業実践

# 化学

ミクロの世界をイメージして、  
多様な事象を説明する力を養う



たけのだい  
東京都立竹台高校

折霜文男 おりしも・ふみお



同校に赴任して3年目。  
理科(化学)。3学年教務。

学校概要

◎設立 1940(昭和15)年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年約280人  
◎2023年度卒業生進路実績 国公立大は、千葉大に1人が合格。私立大は、駒澤大、中央大、東京電機大、東邦大、東洋大、日本大、武蔵野大などに延べ92人が合格。短大・専門学校進学64人。就職8人。

私が  
目指している  
授業

化学では、肉眼で観察することが難しい物質や現象を扱います。生徒がミクロの世界で起きていることを頭の中でイメージすることができなければ、化学は単なる計算や暗記の科目と捉えられかねません。ミクロの視点を持てると、こういった仕組みで化学反応が起きているかを理解することができ、自分なりに図示したり、言葉で伝えたりすることもできるようになります。言わば「原子の見える眼鏡」をかけて思考や表現ができるようになるのです。生徒がそうした力を身につけられるよう、授業では、個人やグループで試行錯誤しながら事象の要因を予想し、実験と考察を重ねて結論にたどり着く経験を生徒が1つでも多く積めるようにしています。



# 授業レポート

## 本時の概要

- [対象] 2年生
- [教科・科目] 理科・化学演習 (学校設定科目)
- [単元] 酸・塩基
- [単元目標] 酸や塩基に関する観察・実験を行い、酸と塩基の性質及び中和反応に関与する物質の量的関係について理解する。
- [授業時数] 全7時間のうちの6時間目



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

## 1 本時の学習目標の共有 10分間



前時までに学んだ酸と塩基の性質について復習した後、折霜先生が、本時は3種類の酸を水酸化ナトリウムで中和して、それぞれ何の物質かを特定する実験を行うと説明。そして本時の学習目標が「酸・塩基を過不足なく中和させるのに必要な要因を見いだして表現できる」ことであると伝えた。

## 2 予想と実験計画を立てる 10分間



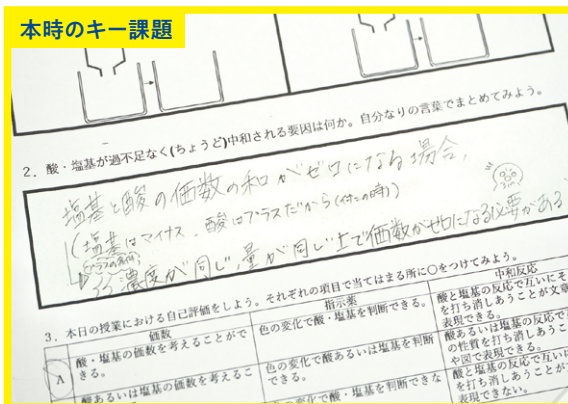
酸・塩基が過不足なく中和される要因について、「水素イオンと水酸化物イオンが同じ量」「それぞれの価数が同じ」などと生徒は予想。各自の予想をグループ内で共有し、意見を交換した後、話し合って決めた実験方法をそれぞれワークシートに記入した。

## 3 グループで実験 20分間



グループごとに実験を実施。3種類の酸それぞれに水酸化ナトリウムを加え、試薬のフェノールフタレイン溶液を入れて色の変化を観察した。生徒は実験をして気づいたことや結果をワークシートに記入。折霜先生は各グループを回り、「それぞれの酸に加えた量をきちんと記録して」などと留意点を伝えた。

## 4 実験結果を考察 10分間



グループ内で話し合いながら、実験結果を図と言葉でまとめた。「酸と塩基の濃度や量が同じで、水素イオンと水酸化物イオンの価数の和が0になる必要がある」などの記述があり、多くの生徒が本時の学習目標に到達していた。最後に生徒はグループの3項目について自己評価を行った。

### 発問・課題設定の観点

## 生徒の実態に応じて 学習目標を検討し、 「主発問」を設定



授業づくりで最も工夫しているのは、学習目標に到達するための「主発問」と「学習活動」の設定です。

例えば本単元では、単元の最後に扱う中和反応の量的関係の学習の時に計算が中心となるため(図1)、数学が苦手な生徒はついてこれなくなる可能性があります。そこで、公式を学ぶ前に化学反応をイメージさせようと、本時は酸の種類を特定する実験を通じて、中和反応の要因を見いだすことを学習目標にしました。

そして、「酸・塩基が過不足なく中和される要因は何か」を主発問とし、生徒が学習目標に到達するために何を学ぶのかを考えやすくなりました。

中和反応は中学校でも学習した内容であり、多くの生徒は「酸と塩基が同じ量の場合に中和する」と理解しています。ただ、生徒が何気なく使う「量」という言葉は、価数と濃度、体積が関連するのですが、生徒の多くはその点が明確になっていないため、実験を進める中でそれに気づけるようにしています。そして、その気づきを図や言葉で表現し、化学反応を具体的にイメージすることができれば、中和反応の量的関係の学習時の計算が理解しやすくなると考え、本時の実験を行いました。

図1 本単元の指導計画(概要)

#### 1 酸と塩基の定義

酸や塩基の水溶液を観察。代表的な酸と塩基の化学式から電離式を書き、酸や塩基の条件を定めるものをまとめる。

#### 2 広い意味の酸・塩基

酸と塩基の化学反応式を考え、反応前後の物質を比較。水溶液以外の反応等で、酸や塩基の条件をまとめる。

#### 3 酸と塩基の価数

3種類の酸にマグネシウムリボンを加え、水素の発生量を観察。酸の価数に着目して、水素の発生量が違う理由をまとめる。

#### 4 酸の強弱

3種類の酸にマグネシウムリボンを加え、水素の発生量を観察。酸の強弱と粒子に着目して、反応時間と水素の発生量のグラフの傾きが異なる理由をまとめる。

#### 5 水素イオン濃度と pH

酸・塩基の希釈を繰り返し、希釈されるごとに水素イオンや水酸化物イオンの量の変化を観察。量の変化を視覚的に整理。

#### 6 中和反応の量的関係①(本時)

3種類の酸を水酸化ナトリウムで中和する実験を行い、酸・塩基を過不足なく中和させるのに必要な要因を見いだす。

#### 7 中和反応の量的関係②

水素イオンや水酸化物イオンの物質量が同じ時に過不足なく中和する量的関係を計算する。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 本時のルーブリック

	価数	指示薬	中和反応
A	酸・塩基の価数を考えることができる。	色の変化で酸・塩基を判断できる。	酸と塩基の反応で互いにその性質を打ち消し合うことが文章や図で表現できる。
B	酸あるいは塩基の価数を考えることができる。	色の変化で酸あるいは塩基を判断できる。	酸あるいは塩基の反応で互いにその性質を打ち消し合うことが文章や図で表現できる。
C	酸・塩基の価数を考えることができない。	色の変化で酸・塩基を判断できない。	酸と塩基の反応で互いにその性質を打ち消し合うことが文章や図で表現できない。

※学校資料を基に編集部で作成。

### 学習評価の工夫

## 期待する状態を イメージして、 ルーブリックを作成



評価は、学習目標や主発問、学習活動との一体化を意識しています。実験などを行う授業では、学習目標や生徒の理解度などを基に、生徒に期待する状態をイメージしてルーブリック(図2)を作成し、ワークシー

トの記述などを評価しています。C評価に該当する生徒には次時以降に、できなかったことができるようにするためのヒントを個別に出すなどの支援をしています。

また、ルーブリックは授業の冒頭で生徒に提示し、生徒がルーブリックの内容を手がかりに学習目標に到達できるようにしています。そして、授業の最後に生徒がルーブリックを基に行う自己評価は、総括的評価の材料にしています。

定期考査で出す問題は、授業での活動と結びついたものにしていきます。教科書や資料集に記載されている内容を覚えていれば解答できる問題ではなく、授業で行った実験などで学んだ知識・技能や思考力などを活用する問題を出しています。

また、定期考査では、思考力・判断力・表現力の育成と評価を目的として、資料を基に自分の考えを述べる論述問題を毎回出しています(P.33コラム参照)。「この視点はよかった」「別の考え方もあるのでは」などと答案にコメントを書き添えて、生徒に化学的な見方・考え方が育まれるようにしています。



## 化学の視点から社会問題に向き合う力を育む

### ■定期考査で出した論述問題(例)

現在はプラスチックの大量生産ができる時代である。次の資料を基に、現在の社会は地球の資源の1つ「プラスチック」を有効に繰り返し使う循環型社会と言えるのか、言えないのか、自分の考えを200文字で述べなさい。

#### 資料1●リサイクル方法

<b>マテリアルリサイクル</b> 廃プラスチックを溶かして、もう一度成形し、プラスチック製品として再生する手法。	<b>例)</b> 作業着、ユニホーム、シャツ、トレー、文具、パレット、コンテナ、ベンチ、フェンス、建築資材、鉄道、自動車部品
<b>ケミカルリサイクル</b> 廃プラスチックを原料になる物質まで分解して、再び化学原料として再生する手法。	<b>例)</b> 飲料用ボトル、ガス化(水素などの化学工業の原料)、燃料
<b>サーマルリサイクル</b> 廃プラスチックを焼却して熱エネルギーを回収したり、固形燃料として再生したりする手法。	<b>例)</b> ごみ焼却熱利用、発電

#### 資料2●廃プラスチックの総排出量・有効利用量・有効利用率の推移

年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2011
廃プラ総排出量	1,006	1,005	994	998	912	945	952	929	940	926	81
有効利用量											
マテリアルリサイクル量	185	204	213	214	200	217	212	204	203	199	17
ケミカルリサイクル量	29	28	29	25	32	42	36	38	30	34	3
サーマルリサイクル量	368	457	449	494	456	465	496	502	535	534	49
合計	582	688	692	733	689	723	744	744	767	768	70
有効利用率(%)	58	69	69	73	75	77	78	80	82	83	8

注) 定期考査では、省略せずに表のすべてを掲載。

問題に使用した資料は、一般社団法人プラスチック循環利用協会「プラスチックリサイクルの基礎知識 2023」を基に作成されたもの。

※学校資料を基に編集部で作成。

私が担当する科目の定期考査は、どの学年でも、複数の資料を見て考察したことを100～200字以内で書く論述問題を出しています。根拠に基づき、化学的な見方・考え方で自分の意見を他者に伝える、思考力・判断力・表現力を育むことがねらいです。

#### ●正解が1つではない問題を出す

特に1年次は、正解が1つではない問題を出します。大半の生徒は最初は「テストの問題の正解は1つ」と思っていますが、私の定期考査を受けるに連れて、必要な根拠を見だし、それに基づいて自分の考えを伝えることができれば得点が与えられると理解します。

例えば、「現在の社会はプラスチックを有効に繰り返し使う循環型社会と言えるのか、言えないのか」について、資料を基に論述する問題を出しました(左記)。言える・言えないのどちらも間違いではありませんから、いかに説得力を持って自分の考えを表現できるかが問われます。そうした問題に何度も取り組むことで、社会問題に向き合う力が育つと考えています。

#### ●化学の視点で世の中の事象を解き明かす

生徒にとって身近で化学的な事象などを題材とし、化学が私たちの生活に密接に結びついていることが実感できるような出題や発問を心がけています。例えば、コロイド粒子の1つである新型コロナウイルスの大きさなどに着目させて、不織布のマスクが予防に有効かを論述させる問題を定期考査で出しました。そうした問題を通じて、化学の見方・考え方が社会・生活の事象を解き明かす力になると気づき、授業に意欲的に臨むようになる生徒も少なくありません。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

自ら考えて表現することを繰り返す中で、「原子の見える眼鏡」を持つ生徒が育ってきていると感じています。そうした生徒は化学反応が起こる仕組みを理解しているので、事象の背景にも目が向きます。教科書や資料集には、事象を視覚化したモデルが掲載されていますが、それらをただ暗記するのではなく、自分で考えて描こうとする姿も見られます。そうした思考を支えるのは、「比較」「関連づけ」「条件制御」「総合的な視点」といった化学的な見方・考え方です。それらが身につくと、化学の領域を超え、多様な情報に基づいて本質を見極め、正解が1つではない問題の最適解を導き出せるようになりますと考えています。これからも、学びの過程を大切にしながら授業を通じて、化学的な見方・考え方を生徒に育んでいきます。

成果と展望  
事象の背景に目を向けて考察できるように



## 「SDGs大学ゼミ」で、探究学習と 大学での学びとのつながりを実感させる

奈良県・私立奈良育英中学校・高校



大学と意思疎通を図る高大連携室と、進路指導部が  
協働し、探究学習を進路選択につなげる

かさまつたかひろ  
**笠松貴宏**

同校に赴任して11年目。入試広報部長。  
前進路指導部長。数学科。

くらもりひろし  
**倉森博司**

同校に赴任して11年目。  
高大連携室室長。

探究学習から  
将来像を描かせる

はらじょうやすゆき  
**原條靖之**

同校に赴任して8年目。  
総合探究科主任。理科。

〈奈良育英中学校・高校の探究学習〉「総合的な探究(学習)の時間」にSDGsに関連する探究学習を実施。中学1年次は「ゴミ問題」、中学2年次は「里山での生活」、中学3年次は「自文化と異文化」をテーマに探究学習に取り組み、徐々に視野を広げていく。高校1年次は「ゴミ問題」を大枠のテーマとして個人で設定した課題を探究し、高校2年次はその課題を継続しつつ、修学旅行先でのフィールドワークをメインに活動。高校3年次は、それまでの経験を基に将来のキャリア像を描いた後、志望理由書を作成する。

### つながりの目的

探究学習と大学での学びの  
つながりを実感させたい



原條 ユネスコスクール  
キャンデイブート校(\*1)  
である本校は、SDGsに

関連する探究学習を実施しています。高校1・2年次はゴミ問題を大枠のテーマとし、自然保護や教育など、生徒個々の興味・関心に沿った切り口で課題を設定して、探究学習に取り組みます。高校2年次の修学旅行では訪問先のバリ島で、ウミガメの保護や企業における貧困問題への活動などについて学ぶ、課題に応じたフィールドワークを行いました。それらの経験を通じて自分と社会とのかわりを考え、将来像を描いて進路選択ができるようになっています。



笠松 高大連携コース(\*2)がある本校には、大学進学において学校推薦型選

抜の指定校推薦の枠が豊富です。過去には、早く合格したくて学部・学科にこだわらない生徒がいましたが、そうした進路選択は大学入学後にミスマッチを起こします。そのため、探究学習と大学での学びのつながりを実感させようと考えました。

\*1 国内審査を終えて、ユネスコ本部にユネスコスクールの加盟申請中(または加盟申請を行う)段階にある学校のこと。 \*2 同校と協定を結ぶ大学の指定校推薦を利用しながら、難関私立大学への進学を目指すコース。

探究学習にこうかかわった……

共通点のSDGsを切り口に  
大学の模擬講義を実施



**倉森** 高大連携の専任職員として生徒の進路選択を支援する中で、生徒に大学での学びをもっと意識して進路選択をしてほしいと考えるようになり、「SDGs 大学ゼミ」を企画しました。本校はSDGsを探究学習のテーマとし、多くの大学もSDGsに取り組んでいきます。その共通点を切り口にして大学の模擬講義を行うことで、生徒が自分の探究学習と大学での学びにつながりを感じられるのではないかと考えました。

2021年度に高校2年次の高大連携コースで同ゼミを実施したところ、生徒から「大学での学びにもっと向き合いたい」「進路選択の幅が広がった」などの声が上がりました。他コースの教師からも「全生徒が目的を持った進路選択ができるようになることに役立つので、全コースで実施したい」といった提案がありました。そこで22年度は2年次全員を対象に年5回、23年度からは2・3年次全員を対象に年3回、1回あたり20〜25のゼミを設けました。生徒は毎回1つのゼミを選んで受講

今後の探究学習を展望する……

探究学習とゼミの  
相乗効果を目指す



**倉森** ジェンダーに関するゼミを受けたある生徒は、その後、講師が行うワークショップに参加するなど、探究学習を深めています。また、「世界津波の日 高校生サミット」に参加した生徒からは、事前学習がしたいと相談され、防災を研究する大学教員とオンライン勉強会を開きました。さらに、ゼミをきっかけにその講師の下で学びたいと

します。事前学習は「総合的な探究の時間」で行い、選んだゼミの内容に関して調べてレポートにまとめます。そのレポートは担任に加えて私も見て、不十分であれば、担任に対象の生徒に声をかけるようにお願いしています。

**笠松** 様々な分野のゼミがあることで、探究学習も進路選択も、生徒が明確に目的意識を持つきっかけになっていると感じています。また、倉森室長が普段から大学との関係を丁寧に築いてくれているため、講師の大学教員も本校のニーズにマッチしています。



**笠松** 様々な分野のゼミがあることで、探究学習も進路選択も、生徒が明確に目的意識を持つきっかけになっていると感じています。また、倉森室長が普段から大学との関係を丁寧に築いてくれているため、講師の大学教員も本校のニーズにマッチしています。

つながりのPoint

“学び”重視でゼミを選べるよう  
講師の大学名を伏せる

生徒に配布するゼミのリストには、「タイトル」「概要」「関連するSDGsの目標」「キーワード」「講師の専門分野・経歴」のみを掲載し、講師の所属大学は明記していない。大学名に引きずられず、生徒が純粋に自分の興味・関心に基づいてゼミを選べるようにするため。男子生徒が女子大学の講師のゼミを受けることもあるが、様々な大学の学びを見て、自分の興味・関心を深めるきっかけになっているという。

講師の専門分野や出身大学・学部、職歴などを掲載しているのも、生徒の視野を広げるための工夫だ。「自分が関心のある分野の研究者がどこで何を学び、どんな経験を積んできたのか。その道筋は多様であり、どの大学で学ぶかではなく、何を学ぶか、どの先生の下で学ぶかが重要であることに気づいてほしい」と倉森室長は語る。



写真 ゼミでは講義だけでなく、グループワークなども行われる。また、ゼミ当日には講師の所属大学が公表される。

志望校を変更して進学した生徒もいます。そのように、探究学習を通じて大学とつながることで、大学名ではなく、自分の大学での学びを重視して進学する生徒が増えてきました。



**原條** 高校1・2年次は、生徒が個々に課題を設定して探究学習に取り組みます。生徒が探究を深めれば深めるほど、担任が対応し切れない状況になっているのが課題です。高大連携室の支援で、生徒が大学教員に直接アプローチして助言を受けられるようになれば、探究学習がより深まると期待しています。

24年度からは高校1年次に同ゼミを拡大するので、生徒は早くから探究学習と大学での学びとのつながりが分かるでしょう。生徒がゼミとの相乗効果で探究学習を深め、進路選択に生かせるよう、これからも支援していきます。

学校概要

設立 1916（大正5）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約400人  
2023年度卒業生進路実績  
国公立大は、大阪教育大、奈良教育大、奈良女子大、和歌山大、大阪公立大、奈良県立医科大、奈良県立大などに18人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、摂南大、関西学院大、武庫川女子大などに延べ633人が合格。



## 校内研修

# 生徒が主体性を発揮できる学校を目指し、 対話的で探究的な教員研修を実施

## 石川県立大聖寺高校

### 1分で分かる軌跡

入学者数の減少が以前から課題だった石川県立大聖寺高校。そうした中でも進路指導に力を入れ、大学進学実績を維持しつつ、学校の魅力化を模索してきた。そこで弥久保悦朗校長が目指す方針として打ち出したのが、「生徒を主語にした学校」だ。そしてそれを実現するための方策として、教師同士の間で対話を通じて考える校内研修「大人の探究」を実施。その結果、教師間で同僚性が高まり、学校の魅力を向上させるための複数の実践が行われた。

#生徒を主語にした学校  
#教師が学校づくりを探究

#### 学校概要

設立 1911（明治44）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約160人  
2023年度卒業生進路実績  
国公立大は、富山大、金沢大、福井大、信州大、名古屋大、神戸大、広島大、富山県立大、石川県立看護大、石川県立大、公立小松大、福井県立大などに35人が合格。私立大は、青山学院大、日本大、同志社大、立命館大などに延べ185人が合格。短大・専門学校進学19人。就職4人。



教務課  
**秋山拓也**  
あきやま たくや  
同校に赴任して2年目。数学科。



企画推進室  
**稲村竜**  
いなむら りょう  
同校に赴任して8年目。理科(物理)。



3学年担任  
**山本紳二**  
やまもと しんじ  
同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科。



生徒支援課長  
**山本潤平**  
やまもと じゅんぺい  
同校に赴任して6年目。保健体育科。



企画推進室長  
**高野英樹**  
たかの ひでき  
同校に赴任して7年目。数学科。



校長  
**弥久保悦朗**  
やくほ えつろう  
同校に赴任して2年目。

## 変革の背景

### 大学進学実績重視から「生徒を主語にした学校」へ

石川県立大聖寺高校は、毎年40〜50人の国公立大学合格者を輩出する地域の進学校だ。しかし、ここ数年は少子化の影響で入学者数が減少。特進クラスや難関クラブ(※1)の設置などによって大学進学実績は維持してきたが、それでも定員割れとなる年があったと、企画推進室長の高野英樹先生は語る。

「校長を始め、教師が積極的に中学校を訪問して大学進学実績をアピールしましたが、入学志願者は増えませんでした。大学進学実績だけで学校の魅力を訴求することに限界を感じていました」

2023年度に赴任した弥久保悦朗校長は、自校の魅力を中学生に直接伝えようと、市内の中学校を訪問して説明会を実施した。そんな中、23年10月に、弥久保校長と高野先生はNITSのコア研修(※2)を受けた。3日間の研修では、小・中学校、

高校の教師が4人1組で、学校の課題について対話と振り返りを毎日繰り返した。その経験が2人の意識を変え、学校の魅力化の方向性を大きく転換する機会になった(図1)。

「それまでの私たちは、『入学定員を充足させるためには、どのような魅力が自校に必要か』といった視点で学校改革を捉えていました。しかし、コア研修を通して、学校の魅力は教師がつくるものではない。生徒が主体性を発揮できる学校になることで本校の魅力化が図れると気づいたのでです」(弥久保校長)

「本校には、若手教師でも学校が抱える問題の解決に向けた新しい取り組みに挑戦することができる文化がありました。そこで、先生方が学校改革への思いを同じにする場をつくることで、学校全体で足並みをそろえて改革を進めることができるのではないかと考えました」(高野先生)

**図1 弥久保校長のコア研修の振り返り**

(前略) 具体的には当初、「どのようにして本校の魅力化を図るか」を探究課題に設定する予定だったが、学び手を主語とし、生徒が真ん中に位置づけられる探究課題となるよう、中森一郎教授(福井大学教職大学院)から助言をいただき、「どうすれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」に探究課題を改めた。生徒が中心となる学校づくりを目標にすることは、学習指導要領の「主体的な学びの実現」に通じるものである。つまり、目指すゴールは「生徒が主体的で生き生きとした姿になる」ことであり、それは「主体性を発揮」している状況にほかならない。(後略)

※学校資料を基に編集部で作成。

## 変革の一手①

### 「生徒の主体性の発揮」をテーマに教師が探究

コア研修を機に、弥久保校長は学校の魅力化の方針として「生徒を主語にした学校」を掲げた。その実現に向けて、自分が受けたコア研修のように、学校の課題について教師同士で対話をし、具体策を模索する研修を自校で実施することにした。

「本校には、若手教師でも学校が抱える問題の解決に向けた新しい取り組みに挑戦することができる文化がありました。そこで、先生方が学校改革への思いを同じにする場をつくることで、学校全体で足並みをそろえて改革を進めることができるのではないかと考えました」(高野先生)

それが校内研修「大人の探究」だ。教師は①授業、②部活動・生徒会活動、③探究学習、④進路学習の中から自分が探究したいカテゴリーを選択し、カテゴリーごとに3〜4人から成るグループを組む。そして「どつ

※1 難関大学を志望する1〜3年生から成る縦割りのクラブ。1・2年次合同講義、特別講師の講演や座談会などを実施。 ※2 NITS(独立行政法人教職員支援機構)が主催する研修。実践の振り返りや対話、知識の習得を重ねながら、課題を探究する力や、探究的な学びをデザインし、マネジメントする力を養う。教諭等が参加する「1年コース」と、管理職と教諭等が2人1組で参加する「2年コース」があり、弥久保校長と高野先生は2年コースを受講中。4人1組の対話は、コア研修の最初に実施された3日間の集合研修で行われた。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

### 校内研修「大人の探究」概要

- 探究テーマ 「どうすれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」
- 2024年度末の学校の姿 生徒が学校の魅力を誰かに自慢したくなる学校
- 進め方 生徒が主体性を発揮する場面として、①授業、②部活動・生徒会活動、③探究学習、④進路学習のカテゴリーを設定。教師はいずれかのカテゴリーを選択し、カテゴリーごとに3～4人から成るグループを組む。探究テーマに基づいた課題をグループ内で設定して取り組み、その結果を共有する。
  1. 1回目の研修でグループごとに課題を設定
  2. 3学期に、設定した課題に取り組む
  3. 2回目の研修で取り組みの結果を共有

#### ●第1回 事前課題（11月中旬に職員会議で告知）

「私が本校で大切にしてきたこと」「今、本校が組織的にチャレンジしていることは何か。その中で私は何に取り組んでいるか」「私が本研修に期待していること」を文章でまとめる。

#### ●第1回の進め方（12月中旬に3日間、1日2時間で実施）

1日目 事前課題を基に、1人約20分間で各自の考えを発表し、質疑応答を行う（写真）。全員の発表を踏まえて、各自、気づきや振り返りをまとめる。

2日目 1日目の振り返りを各自が発表（発表と質疑応答1人約15分間）。他者との対話から気づいた点を含めて各自でまとめ、それまでの活動を踏まえて、3学期に取り組む課題をまずは個人で考える。

3日目 2日目の振り返りを共有した後、2日目に続き、3学期に取り組む課題を各自で考える（必要に応じて、グループ内で対話する）。各自が考えた課題をグループ内で共有し、グループの課題を設定。それを紙に書き、最後に全体発表を行う。



写真 第1回「大人の探究」の様子。

※学校資料を基に編集部で作成。

すれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」を探究テーマに、グループ内で課題を設定して取り組み、結果を共有するという流れの研修だ。

「大人の探究」の進め方（図2）は、弥久保校長と高野先生、そして各カテゴリーのファシリテーターを務める4人の教師と一緒に練った。「部活動・生徒会活動」を担当した山本潤平先生は次のように語る。

自ら自校のよさをSNSで発信し、学校説明会で中学生に自校の魅力を熱心にアピールする姿を見てきました。そうした先輩に憧れて本校を志望する中学生は少なくありません。

生徒が主体性を発揮できる学校を目指すという方針は、学校の魅力を高めることにつながると感じました。

新たな校内研修に、教師からは戸惑いの声も上がった。そこで、弥久保校長は「大人の探究」の趣旨を丁寧

に説明するとともに、「まずは一度挑戦してみよう」と呼びかけた。

そうした中で行われた1回目の「大人の探究」。どのグループも活発な対話が行われた。例えば、「探究学習」のグループでは、「総合的な探究の時間」について、生徒が課題を自分事として捉えられず、意欲が続かないことや、教師側が課題設定における支援に十分な時間や労力を割いていないのではないかとといった指摘があった。やらされ感が探究学習に影響しているという点についてはまず、1年次の探究学習に対する生徒の熱量が高まるよう、指導内容を見直すこととした。

「授業」のグループでは、生徒の学習意欲の向上について様々な意見が出たと、「授業」のカテゴリーを担当した秋山拓也先生は語る。

「多様な視点で対話が行われるよう、担当教科が異なる教師でグループを作りました。生徒の学習意欲を喚起するために生徒主体の活動を増やしたいが、限られた授業時数の中で、そういった活動を行う時間を設けること自体が難しいなどと、教師が持っている理想や葛藤が赤裸々に

### 第1回「大人の探究」の振り返り（抜粋）

- 3日間では足りなかったが、それでよいと思った。残ったモヤモヤを実践につなげて、まずやってみる3学期にしたい。
- 問題を1人で抱え込むことは、問題の解決はおろか、課題の洗い出しさえも難しいことを改めて感じた。
- この研修を経験して、生徒がいかに短い時間で探究しているかを実感した。正解が1つではない課題をみんなで考えることや、自分及び他者との対話の大切さ、自分の考えを他者に伝える難しさなど、いろいろな学びを得ることができた。
- 腹を割って話し合えてワクワクした。私たちに必要なのはやはり時間なのだと思う。きっと生徒にも時間が必要だろう。

※学校資料を基に編集部で作成。

語られました」

1回目の「大人の探究」実施後に取ったアンケートでは、全員が「有意義だった」と回答。「あつという間の2時間だった」「意見を共有することで、自分の考えが深まった」といった声が寄せられた（図3）。

「ここ数年、働き方改革やコロナ禍の影響で、教師同士がじっくり語り合う場がありませんでした。どの教師も、自分の胸の内を明かしたいという思いを持っていたのだと思います。対話の大切さを改めて感じました」（高野先生）



## 変革の一手 ②

### 課題に基づき、活動の改善や新たな活動を実施

3学期は1回目の「大人の探究」で設定した課題に取り組み、その成果が、3月に実施した2回目の「大人の探究」で共有された。例えば、「進路学習」のグループでは、面談週間「出そう自分、知ろう自分」を実施した。全教師が授業や部活動などで接点のない生徒3人ほどと面談し、その内容を「Classi」(\*3)の生徒カルテに記入して教師間で共有した。「進路学習」を担当した稲村竜先生は、新たな活動の意図をこう説明する。

『大人の探究』の中で、『あまり接点のない教師になら、生徒は普段とは違う自分を出せて、生徒把握がより深まるのではないか』という提案があり、実践しました。実際、担任や部活動の顧問が知らない一面を見せる生徒がいました。教師と生徒が互いに知っている関係が広がれば、学校の雰囲気さらによくなるのではないかとといった期待もありました。

「授業」のグループでは、日本史担当の教師が、講義型の授業と生徒主体の調べ学習の授業のどちらがよいか、生徒に取ったアンケートの結果を発表した。生徒の選択は半々だったが、今後は生徒主体の活動を増やし、知識を習得する学習もバランスよく行うことが報告された。

### 変革の成果と展望

#### 教師と生徒の対話の場

#### 「探究@SEEK」を開始

対話的で探究的な教員研修「大人の探究」は24年度、教師と生徒の対話の場「探究@SEEK」(\*4)へと進化した。23年度の終業式で「大人の探究」の様子動画を見せて生徒に参加を呼びかけると、新2・3年生の約20人から参加希望があった。事前アンケートでは、「学校生活をより快適にしたい」「自分の価値観を広げたい」といった期待が寄せられた。

「探究@SEEK」でも4つのカテゴリーから探究したいカテゴリーを選び、生徒と教師が対話を行った。

「進路学習」では、自習用に教室を開放する「土曜自習」について、「自由に話し合える教室」「教科ごとの教室」など、目的に応じた教室を設けてはどうかと、生徒からアイデアが出された。「探究学習」を担当した山本紳二先生は、生徒の変化をこう語る。

「探究する教師の姿を見て、この学校は自分の意見を聞いてくれるといった安心感や期待感を持つ生徒が増えてきています。普段は物静かな生徒が『探究@SEEK』の場で

熱心に意見を述べるなど、生徒の新たな面を見ることもできています」

今後の課題は取り組みの精選だ。「大人の探究」によって同僚性が高まり、生徒を主語とする学校を指す共通認識が教師間で持てました。新たな挑戦をする教師も増えています。そうしたよい面を維持しつつ、校務量が増えないよう、取り組みを精選することが課題です。教師も生徒も幸せな学校を今後も目指していきます」(弥久保校長)

### ベネッセが見た軌跡

#### 生徒を主語にした対話が生む、地域拠点校の新たな伝統

「大人の探究」の中で、先生方が生徒を主語に対話し、話が行き詰まった時は「生徒はどう感じるか?」と、必ず生徒の目線に立ち返っていたことがとても印象的でした。先生方それぞれが持つモヤモヤやワクワクが対話を通じて共有されることで、その話題に関連する書籍を読んで翌日の対話に生かしたり、生徒にアンケートを取って実態を把握したりと、新たなアクションも生まれていました。こうすればうまくいくといった正解がないからこそ、先生方自身が生徒の目線で「こうしてみたい!」と思うアイデアを、対話を通じて共有できたことが大きな価値だったのかもしれませんが。目の前の生徒を主語にした対話からは、大聖寺高校の新たな伝統が生まれ続ける予感がしております。

これからも北陸地域の先生・生徒・学校の新たな挑戦を後押しできるように、全力で支援させていただきます!

(株)ベネッセコーポレーション北陸支社

石川県立大聖寺高校担当 山田章浩



\*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。 \*4 学校名の「大聖寺」から同校が「聖高(せいこう)」と呼ばれていることにちなんで命名された。

# 新課程 1期生の志望動向と

# 学習の特徴から見えてくる指導のポイント

ベネッセ教育情報センターは、2024年3月にオンラインセミナー「新課程1期生指導スタート研究会 出願指導編」を開催。大学入試環境の特徴や変化について整理し、2024年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」の結果から、新課程1期生の指導のポイントについて考察した。

## 新課程

### 1期生指導のキーワードは心・技・体

#### 最新動向や過去の事例から 指導のポイントを考察

いわゆる「新課程1期生入試」となる2025年度大学入試までいよいよ1年を切った。新学習指導要領に対応した大学入試は現行の入試からどのように変わり、そしてどのような指導が求められるのかを明確化するため、ベネッセ教育情報センターは24年3月、オンラインセミナー「新課程1期生指導スタート研究会」を開催した。

同研究会は、出願指導編と教科指導編の2回にわたって行われ、出願指導編で

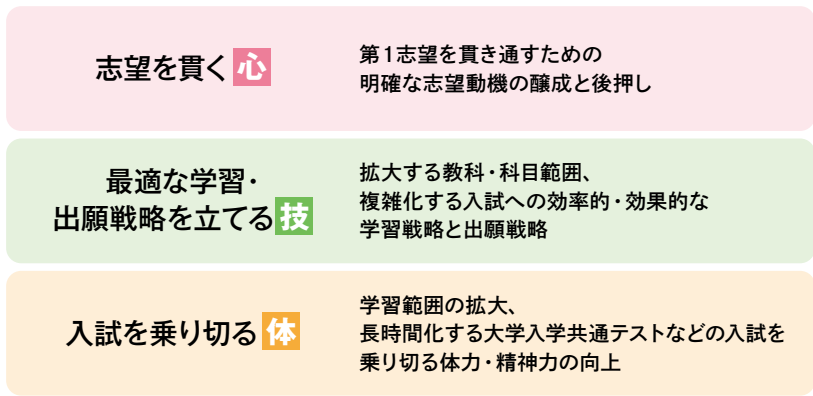
は、近年の大学入試環境の特徴や変化について整理するとともに、24年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」の結果から新課程1期生の志望動向と学習の特徴を分析した内容を報告した。また、前回の改訂の学習指導要領に対応した大学入試として初めて実施された15年度大学入試や、1回目の大学入学共通テスト（以下、共通テスト）などの入試の変化期の実践事例を振り返った。そうして、25年度大学入試に臨む新課程1期生への指導のポイントについて考察した。

考察の結果、新課程1期生指導のポイントは、「心・技・体」をキーワードと

して整理された（図1）。まず「心」は、志望を貫く心を指す。大学入試環境が大きく変化の中では、生徒一人ひとりに第1志望を貫き通すための明確な志望動機を醸成することが、これまで以上に求められる。次に「技」は、選抜方法が多様化する中で、生徒自身が志望校合格のための最適な学習スタイルを構築し、出願の戦略を生徒自身が立案できるスキルを指す。そして「体」は、学習範囲が拡大し、共通テストの試験時間が延びる中、生徒が入試本番で最大のパフォーマンスを発揮できる体力・精神力を指している。

次ページからは、大学入試環境の特徴や変化、新課程1期生の志望動向と学習の特徴、そして過去の指導事例から、なぜ「心・技・体」がポイントになるのかを解説していく。

図1 新課程1期生の指導の3つのポイント



# 10 大学入試環境の特徴・変化

## 【情報Ⅰ】の対策をいかに効率的に行うか

25年度大学入学共通テスト（以下、25年度共通テスト）では、国立大学は95%以上の募集単位で「情報Ⅰ」を必須で課す予定となっている。共通テストの合計配点に占める「情報Ⅰ」の配点割合で最も多いのは5%（1000点満点で換算すると50点）で、全体の43%弱の募集単位が5%以下だ（図2）。

「情報Ⅰ」は25年度共通テストから新たに設定される出題科目であるため、各校はその対策を模索しているさなかだが、夏季休業などの長期休業中の補習や、生徒が家庭で自学自習できる教材の準備などを行っている学校が多い。前述の通り、共通テストの合計配点に占める「情報Ⅰ」の配点割合は大きくはないため、いかに効率的に学習していくかがポイントになる。

また、地理歴史・公民では、6つの出題科目より最大2科目を選択するが、「地理総合／歴史総合／公共」の選択を

不可としている大学・学部がある点に注意が必要だ。特に難関国立大学では選択不可としている大学・学部が多い（300募集単位のうち99%が選択不可）。一方で、ブロック大（\*）やそのほかの国公立大学では、「地理総合／歴史総合／公共」の選択が認められる大学・学部が少なくない。さらに、理系の募集単位に限定すると、国立ブロック大で「地理総合／歴史総合／公共」が選択できない大学・学部は一部だ。

「地理総合」「歴史総合」「公共」はいずれも必修科目であるため、受験生にとって『地理総合／歴史総合／公共』は、有効活用することができる受験科目とも言えるだろう。

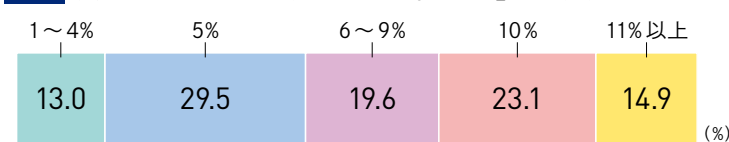
## 【体】試験時間の拡大により、生徒への負担が増加

25年度共通テストでは、国語、数学②の試験時間が現行よりも10分増える。また、情報（試験時間60分）の新設により、6教科受験の生徒については、2日間の

合計の試験時間が現行よりも80分増加することになる（図3）。特に「情報Ⅰ」の試験が実施される2日目は、受験生にとっては体力的にも精神的にも厳しい1日となることが予測される。実際、24年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」の実施校の教師からは、「6教科を受験した生徒は疲れ切っていた」「終盤は生徒の集中力が落ちていた」といった声が聞かれた。そのため、「共通テスト

の模擬試験の機会をできるだけ設けて、本番の『実施形式』と『実施時間』に慣れさせる」「授業はもちろん、学校行事においても思考力や読解力を発揮する場面を多く組み込んでいる」「リスニング（1日目最終科目）や『情報Ⅰ』（2日目最終科目）の演習を1日の最後の時間帯に実施することで、ある程度疲れた状態で問題を解くことを経験させている」といった対策が各校で行われている。

図2 共通テストの合計配点に占める「情報Ⅰ」の配点比率



※ 2024年1月下旬時点の大学公表情報を基に編集部で作成。  
 ※ 共通テストの「情報Ⅰ」を必須で課し、該当情報の公表が確認された1,816募集単位（大学・学部・学科・日程・方式）。  
 ※ 情報を「点数化しない」と公表した北海道大、徳島大、「ボーダーライン上でのみ加味」と公表した高知大などの募集単位は集計対象外。

図3 25年度共通テストからの試験時間割（イメージ）

	1日目		2日目
地理歴史 公民	2科目受験 9:30～11:40 1科目受験 10:40～11:40	理科	2科目受験 9:30～11:40 1科目受験 10:40～11:40 理科専門と理科基礎の 試験時間を統合
国語	13:00～14:30 現行より試験時間10分増	数学①	13:00～14:10
外国語	15:20～16:40	数学②	15:00～16:10 現行より試験時間10分増
リスニング	17:20～18:20	情報	17:00～18:00 2日目の最後の 時間帯で実施

※ 独立行政法人 大学入試センター「令和7年度大学入学選抜に係る大学入学共通テストの問題作成の方向性及び試作問題等について」（2022年11月9日）を基に編集部で作成。

\* ブロック大：筑波大、千葉大、横浜国立大、新潟大、金沢大、岡山大、広島大、熊本大、東京都立大、大阪公立大

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

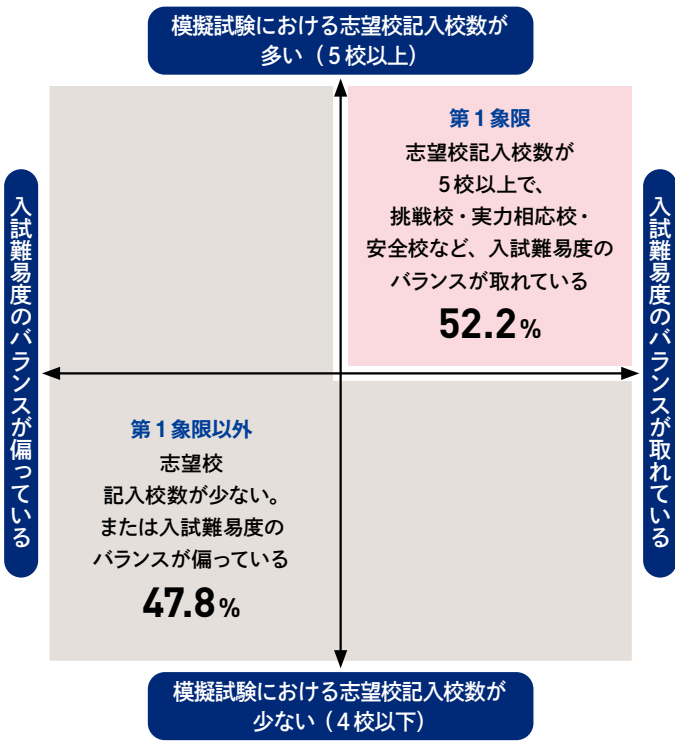
# 新課程1期生の志望動向と学習の特徴

## 心 難関大学を目指す生徒ほど 強気の志望の維持が必要

24年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」は、受験者数が25万人を超えた（前年比指数106）。受験者数の増加に伴い、模擬試験実施時点での国公立大学志望者数は前年比指数で108、私立

大学志望者数は前年比指数で105となった。中でも、難関国立大学は前年比指数111、ブロック大が110と高くなってきている。国公立、私立問わず、入試難易度の高い大学群ほど、志望者数が増加する傾向にある。ただ、後述するように、過去の入試の変化期では受験校決定時に国公立大学を敬遠する傾向があっ

図4 模擬試験における志望校記入校数と入試難易度とのバランス



※ 24年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」の判定と志望校記入校数の集計結果を基に編集部で作成。  
 ※最大8校記入可能な志望校の判定（ABCDEの5段階）のうち、判定が3種類以上ある場合を「バランスが取れている」として集計。

た。高い目標を掲げている生徒の志望の維持・向上が指導のポイントとなる。

## 技 入試難易度のバランスを考慮した志望校選択を

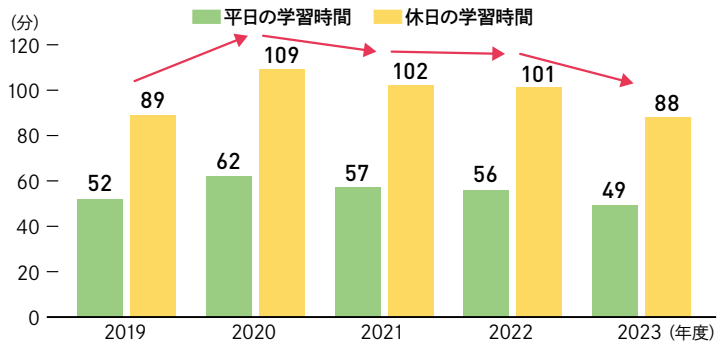
図4は、24年進研模試「大学入学共通テスト模試2月」の合格可能性判定と志望校数を集計した結果をまとめたものだ。生徒は、出願時は共通テストの自己採点後の志望校変更も考慮して、挑戦校、実力相応校、安全校など、入試難易度をバランスよく検討しておくことが重要となるが、模擬試験が実施された2年次3学期の時点では、十分に検討できている生徒は半数程度にとどまっている。

特に、志望校の記入校数が4校以下の生徒の割合は20%以上となっており、その現状は看過できないものだ。入試難易度のバランスを考慮した併願パターンが組めるよう、大学・学部・学科研究にしっかりと取り組むことが重要となる。

## 体 学習内容の増加に見合う学習時間の確保が必要

現行の学習指導要領では学習内容は増加したが、生徒の学習時間は全体とし

図5 学習時間の過年度比較



\*各年度のスタディーサポート2年生第1回の全国集計値を基に編集部で作成。  
 \*年度によってばらつきはあるが、おおよそ45万人のデータを集計。

ては増加していないようだ(図5)。新型コロナウイルスの感染拡大によって臨時休業となる学校が増えた20年度は、一時的に生徒の学習時間が増加したが、学校生活も日常を取り戻しつつある。今、生徒の学習時間は増えていない。入試本番までの限られた時間の中で、強気の志望の維持を下支えする学力を養うためにも、学習習慣の充実が求められると言えるだろう。

# 過去の事例に見る指導のポイント

**心** 易きに流れず、  
志望を貫く意志を育む

今回のオンラインセミナーでは、過去の入試の変化期の特徴と、その変化を乗り越えて生徒の希望進路の実現を後押しした高校の事例も紹介した。

13年度から15年度にかけて（先行実施を含む前回の新課程入試）の大学志願者数の推移を見ると、国公立大学の志願者数は減少している。また、共通テストが導入された21年度入試では、前年比で国公立大学及び私立大学の志願者数は減少している。入試の変化期においては、出願校の決定時に特に国公立大学を敬遠する傾向が見られるため、志望を貫く強い意志を育てることが重要だ。

前回の新課程入試で、「目標を高く持たせる進路指導」に学校全体で取り組んだ公立A高校では、出願校に対する生徒の納得度を上げるため、3年次の3学期を迎えるまでに複数回、出願のシミュレーションを行い、生徒だけではなく、保護者も巻き込んで、納得感の高い出願

校の決定を指導したという。

**技** 生徒の現状を把握し、  
課題を明確化する

公立B高校では、15年度入試において、教科担当の教師が生徒と面談を行い、学習方法についてアドバイスをしたり、生徒が立案した学習計画を基に担任が面談を行い、夏季休業中の学習を細かく確認したりするなど、生徒の学力や学習習慣などを詳細に把握し、課題に応じた指導を成績層別に行うことで成果を上げた。

そのように、入試の変化期においては、「生徒の現状把握」「進路の納得感の向上」「すべきことの明確化」がポイントとなるようだ。

\*  
本コーナーでは出願指導編の内容を紹介したが、教科指導をテーマとしたオンラインセミナー（下図）も開催した。いずれもアーカイブ動画を公開しているのでご覧いただきたい。

## 新課程1期生指導スタート研究会 教科指導編サマリー

教科	大学入学共通テスト試作問題の主な特徴	大学入学共通テスト模試 2月結果より	指導のポイント
国語	■生徒の言語活動の場面が設定されており、文章・図表・グラフが複数提示され、それぞれを解釈する力や関連づけて考察する力が求められた。	■図や表などを含めた、様々な種類のテキストの読解と、複数のテキストを関連づける思考力が求められた。	■図や表などを含めた複数のテキストを用いた問題演習。
数学	■数学②の『数学Ⅱ、数学B、数学C』の選択問題については、「数学B」「数学C」の4項目から3項目の問題を選択解答。	■問題文などから必要な情報を読み取り、図示をしながら数学の問題に落とし込む力が求められた。	■問題文から読み取った情報を、図示などしながら整理する。
地理 歴史、 公民	■主題を設定して生徒が調べた内容をまとめる場面や、授業中に生徒同士で意見を出し合って考察する場面が扱われるなど、「探究活動」や「授業」を意識した出題が多く見られた。	■生徒が調べ、まとめたプリント、探した図版、それらをまとめた資料などを踏まえ、論理的に考察する力が求められた。	■題意（テーマ、課題）の的確な理解と、場面に応じた情報活用能力、大局的視点を身につけさせる。
情報	■モデル化とシミュレーション、論理回路など、以前のサンプル問題（2021年3月24日公表）では見られなかった分野からも広く出題された。	■プログラミングは基本事項や基本構造の理解、プログラムの考察が求められ、得点に大きく差がつく結果となった。	■情報で扱う内容を自分ごととして捉え、積極的に学ぶ姿勢を育む。

◎新課程1期生指導スタート研究会のアーカイブ動画（出願指導編・教科指導編）は  
こちらからご覧いただけます。

[https://bhsobenesse.ne.jp/hs\\_online/sidou/shinkatei/article/20240401\\_sidoustart/index.html](https://bhsobenesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/article/20240401_sidoustart/index.html)

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



2024年4月にVIEW next編集部に所属となりました丸山です。初めての取材は、奈良県・私立奈良育英中学校・高校でした。緊張しながら奈良駅に到着すると、大勢の外国人旅行者と修学旅行生の姿が。楽しそうな旅行者に囲まれて緊張が少しほぐれ、わくわくしながら学校へ向かいました。同校には、SDGsをテーマにした探究学習やゼミについて伺いました(P.34～35参照)。高校2年次の修学旅行においても、環境問題や教育など、探究学習で設定した課題に応じて自分の興味・関心を深めるとのこと。様々な工夫に、感動しきりの初取材でした。

取材が無事に終わり、ほっとしながら奈良公園を通ると、そこにも修学旅行生のグループが。取材で伺ったお話を思い出し、「この生徒たちは修学旅行でどんなことを考えるのだろう」としみじみとしながら、鹿を眺めつつ帰宅の途に就きました。(丸山)

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!



『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします!

【友だち登録の方法】上の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加してください。

VIEWnext

高校版 2024年8月号

8月20日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は  
年6回の発刊です。

## 読解力は学んだことの生かし方の理解にもつながる

授業をしていると、数値や単語を覚えるのが得意な一方で、学んだことの生かし方を理解できていない生徒がいることに気づく。「読解力」を育むことで、学んだことを生活の中でどのように生かしているのかが理解できるようになるのではないかと思う。4月号の特集の[Introduction]で、早稲田大学教職大学院の田中博之教授が述べていた「読解力を高めるには、様々なテキストを読むだけでなく、読んで分かったことや考えたことをまとめたり、そのまとめを他者に伝えることを意識して構成し直し、表現したりするアウトプット活動が欠かせない」という考えに共感した。高校は、社会に出る前に人間の基礎力を育成する場である。知識だけでなく、考える力や表現する力を鍛えることの大切さを改めて感じ、大変参考になった。

愛媛県・私立松山聖陵高校 大谷修一

## 事例を参考に、自身の授業の内容を変更

「総合的な探究の時間」でどのような活動を実施しようか悩んでいた時に、4月号の特集の「Case 1～3」、埼玉県・私立立教新座中学校・高校、神奈川県立横浜国際高校、北海道名寄高校の記事を読んだ。それらの記事で紹介されていた、数ある情報の中から自分に必要な情報を取捨選択する活動や、メディアの表現方法に着目して自分で記事を作る活動にヒントを得て、予定していた「自分の好きなものを羅列して、自分を見つめてみる」という活動を、「自分について記事にして、誰かに伝える」という内容に変更した。今回紹介されていた実践そのものも、本校に合う形にして実践していきたい。

愛知県 匿名希望

## 日常生活の中でも読解力は育める

4月号の特集の「Dialog」での、北海道・市立札幌藻岩高校の対馬光揮先生との対談の中で、つくば言語技術教育研究所の三森ゆりか所長が述べていた、「読解は、『なぜ』『どうして』という疑問から始まります。教師が日頃から質問を繰り返すことで、生徒は理由や根拠をしっかりと考えながら読み、そして理路整然と話せるようになっていきます」という言葉が心に残った。読解力は具体的な教材を通じてだけでなく、日常生活の中でも養える場面がたくさんあると思った。先日、担任をしている1年次のクラスで文化祭の出し物について話し合った。私が時々問いを投げかけて議論の進行を助けたが、そうした時にも読解力を育むことができるのだと感じた。

和歌山県立橋本高校 寺田順子

## 問いの重要性や、海外とのつながりの意義を感じた

4月号の「主体的・対話的で深い学び 授業実践」で紹介された愛知県立大府高校の野々山新先生の記事を読み、問いの重要性を改めて感じた。「交易はよいもの」という生徒の認識を揺さぶるために、単元を貫く問いと、その問いにつながる各時での問いで構成されていた点や、生徒の考察が浅いと感じた場合、生徒間で考察を比較させたり、着目すべき点を指摘したりするといった指導が参考になった。中国の高校生との交流でも、実際に対話をしたからこそ気づける価値観の違いがあり、海外とつながる意義を感じた。それらの点を自分の授業改善に生かしていきたい。

静岡県立静岡東高校 樋田範文

# VIEWnext 高校版 創刊50周年記念セミナー開催のご案内

高校現場を見つめ続けて50年。  
これからも、先生方とともに未来を描く。

弊誌『VIEW next』高校版は、1974年に『進研ニュース』として創刊し、『VIEW21』、そして『VIEW next』と名称を変更しながら発刊を重ね、2024年8月に創刊50年を迎えます。

この50年の間に社会は様々に変化し、それは教育現場にも大きな影響を及ぼしてきました。その中で弊誌は、社会や時代によってその答えが変わる「学校をどこへ、どう導くか」という問いに、学校を牽引する先生方とともに向き合い続けてまいりました。

VUCAの時代と言われる、変化が激しく、予測困難な現代においては、その問いの答えはどのようなものなのでしょうか。そこで弊誌は、これからの教師に求められるリーダーシップを考えることでその答えのヒントを見いだすべく、「次代を創るリーダーシップとは」をテーマに、創刊50周年を節目としたオンラインセミナーを企画いたしました。

管理職を始めとするリーダーのお立場でいらっしゃる先生はもちろん、将来の学校を担われる若手の先生も含め、多くの先生方のご参加をお待ちしております。

## 学校をどこへ、どう導くか — 次代を創るリーダーシップとは

参加費無料

Session 1  
基調講演

これからの高校教育と、管理職・ミドルリーダーに求められる役割と資質

Session 2  
特別鼎談

魅力的な学校の実現に必要なリーダーシップと組織づくり

※プログラムの内容は変更になる可能性があります。あらかじめご了承ください。

開催日時

2024年7月26日(金)  
15時00分～17時00分

形式

オンライン(ライブ配信)

※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。  
※登壇者の都合等により、配信内に録画再生を含む場合があります。

参加申し込み方法

右の2次元コード、  
または下記URLからお申込みください。  
<https://benesse-hs.jp/vby46>



参加申し込み締め切り

2024年7月23日(火)



生徒と創る学びの情景

# 誰もが輝くクラスに

北海道岩見沢東高校 小林拓真先生



学校初の特進クラスを受け持って3年目の小林先生。「私は高校入学時は劣等生でしたが、勤勉なクラスに所属したおかげで学びに目覚め、教師としての私がいま。高校生の可能性は無限大です。その力を発揮できるよう、生徒一人ひとりが自ら考え、行動するクラスを目指しました」と語る。まず、入学時から小林先生は自分のことを話し、生徒の発言も受け止め、何でも発言できる空気づくりに努めた。そして、クラスの活動では多くの生徒がリーダーを務められるようにし、数学の授業では問題の最適解を生徒同士で話し合う活動を続けた。2年次は、苦手克服など、自分で目標を立てて、取り組む内容を発表し、生徒間で助言し合う場も設けた。

そうした活動を通じて、自ら課題を考え、それに取り組み続けたことで、生徒は秘めた力を開花させていった。控えめな生徒がムードメーカーになったり、普段はふざけている生徒がここ一番でまとめ役になったり。「小林先生は結果だけでなく、過程も見ても認めてくれる。だから、めげずに頑張れる」と、生徒は言う。3年次の今、生徒は自分たちでクラスでの話し合いを進め、授業では最適解を納得いくまで議論する。入学時から小林先生が思い描いてきた自走するクラスが形づくられている。

こばやし・たくま 同校に赴任して5年目。数学科。3学年担任。進路指導部。

北海道岩見沢東高校 1922(大正11)年設立/全日制・定時制/普通科/共学/1学年約160人(全日制)/2023年度卒業生進路実績(全日制) 国公立大は、北海道大、東京海洋大、信州大、京都大、神戸大などに85人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、明治大などに延べ285人が合格。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル 0120-350455 [受付時間] 月～金8:00～18:00/土8:00～17:00(祝日、年末・年始を除く)